

転生の間で会った幼女に惚れた

トマボ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深夜テンション書きなぐりの話。

タイトル通りです。

タグ適当です。

目次

転生の間で会った幼女に惚れた	1
甘やかさそうと思っただら骨抜きにされた	13
無駄な抵抗	24
サプライズ仕掛けたら逆に嵌められた	32
やはりその幼女に惚れ直した	43
飛ばされたから戻ってみた	56
お茶の間神の間	64
飛ばされたから戻ってみた	69
飛ばされたから戻ってみた	80
騒ぎすぎて怒られた	91
そんなこともあった	98
初心に戻ってみた	103
不毛な争い（毎回こんなことをしています）	109
○○○○が欲しかった	121
泣き寝入りする幼女を甘やかしたかった	128
そこは変わって欲しかった	137
とつとつクリアしたかった	151
伏線だけ貼ってみた	164
痛々しさに転んでみた	172

転生の間で会った幼女に惚れた

やあ、巷で流行りのオリ主だよ。

もはや説明は不要だと思うが、いちよう起こったことを振り返ってみようか。

事故った

以上である。

特に何の事件性もないただの事故である。強いて言うならば、少し電柱と喧嘩してみたら負けてしまっただけだ。

凄く、自業自得です。本当にありがとうございました。

んで、気を失って間もなくご臨終した訳だが、なんで意識あるのん？いや、田舎で○やんばすライフは始まらないと思うが。実はまだ生きててゆうたいりだつゝ☒？してるだけかもしれない！

などと、考えているとこれまた不思議なもので謎の白い光の玉がしゅわ〜と現れた。

それが現れると同時に周囲もただの真っ白い空間から、真っ黒な空間へ！

∴画像処理して2値化でもしたんです？

いやいや、映像にしてもすげーなど乏しい感想を浮かべていたら、「お褒め頂き光栄ですね〜。」と、俺の感性に響くような声でした。

おー、幻聴先輩じゃないっすか。おつかれーっす。声どうしました？イメチェンですかね。いやいや、先輩の声はあのままの機械音声で良いんですよ。水臭いんだからまったく。俺と先輩の仲でしように、いったい何年付き合ってると思ってるんですか。

「幻聴でもイメチェンでもないですよー。」

そこで2度目の癒し声。まあ、この時点でネットで小説漁った経験のあるオタクならある程度察しつくよね。

ロリボイス

死にかけ（暫定）

謎の空間

これは俗にいう神様のなやつなのではなからうか。

「はい、正解ですよー。」

ほら、答え返ってきたし。声出てないのに。正解だつてさ。やったぜ。

いやいや待て待て、まだ信じるには早いぞ。状況的にいろいろ困惑してる最中ではあるが。

えーと、ならば、俺自身ですら書類が無いと忘れかけてるようなものを……。そうだ！

Q. 私の口座の残金はいくらでしょう？

「答えられますけど、言ってしまうって宜しいのですか？」

いえ、やっぱり結構です (泣)

違うんすよ、その、ね？ いつの間にか消えてたんすよ。あんまり使った覚えは俺には無い。つまり、これは妖怪の仕業なんだ！

「カード支払いが原因では無いですかねー？」

そうとも言う。

むしろ、そうとしか言わないのだが、俺は認めたく無い。

うーん。それにしてもこの筒抜け感は慣れんな。考えてることが勝手に伝わるのは楽だがなんだかなーって感じがするよね。

「それは良く言われますねー。私も読もうとしなければ伝わらないのですが、貴方は今喋れませんので我慢して頂きたいのですよ。私も仕事ですので申し訳ありません。」

∴それはそうと、そろそろ落ち着きましたか？

落ち着きましたかと、言われてみれば割と混乱していたことに気づく。そして、全てを飲み込めたわけでは無いが、だんだんと察しはついてきたので冷静に考えが浮かぶようになってきたことを自覚できる。

あ、やっぱりもう死んじやってんの？

「はい、それはもう綺麗な死顔でしたよー。」

そっかー。と、割と怖い会話を素直にストンと受け止めることができた。前知識にプラスして実感あるとこんなもんかね。未練がないわけじゃ無いけど。

「それは良かったです。暴れ出そうとする方もいらつしやいますから。実体はないのでそれは出来ませんけどねー。」

うふふくと、笑う光の玉。その声なのに姿無いのが残念でならない。……………ふむ。

すみません。ちょっとだけ宜しいですか？

「ええ、構いませんよー。」

ありがとうございます。それでは、俺が今から思い浮かべる本のタイトルを読み上げて貰えますかね。

「いやらしい本でしたら断らせて貰います。」

……………。

「……………。」

何故分かったし。

「神ですからねー。そして私に同じようなことをさせようとしたのは貴方がはじめてではないですよー。」

ー…先人達に敬意を表する。

そうして、俺が黙祷していると、神様（仮）が言った。

「貴方は話が早いようですが、脱線するタイプのようですから、身体が見えるようにしましょうか。その方が話しやすいでしょう。それに、地の文との分け方が分からなくなってきましたから。」

神様、それはメタイです。

俺のツツコミも軽く躲すとコマンド実行！と言ってブレ始める光の玉。

そして、ピカツと光るとさつきまではあやふやだった俺の身体も死ぬ前の服装そのままになっていた。

ついでに私もですーっと、光の玉が再度ピカツと光を発し、それが収まると、そこには金髪幼女がランドセルじゃ無い方の天使の羽を背中に生やし、鎮座していた。

「神は居た…」

「はい、神ですよー。」

声が出るようになっていくことに気づきつつも、目の前でドヤ顔を浮かべるロリ神様をよく見てみる。

可愛い（確信）

普通に可愛い。社長だったらふつくしいって言ってる場面だとも思うよ。うん。

「ありがとうございますー！。それでは早速本題に入らせて頂きますねー。」

「ばっちゃん。」

慣れた様子の事務的対応に作り笑い。この幼女やはりできる！と、やっぱり内心ふざけながら話を聞くことにする。

「貴方は先程亡くなられました。しかし、本来の死に方ではありませんでした。」

「あ、そうなんですか。」

「ええ、酔っていたわけでもないのに電柱に向かって喧嘩を売りに行った訳ですからね。」

「まあ、確かに。考えてみればおかしいですよ。これじゃ、俺の頭がイかれてたとしか言えませぬね。」

「それは、否定できませんが、電柱ですからねー。」

「そうですねー。電柱ですからねー。」

「あつはつはつはつはー。」

笑いあつてみると平和よね。目は笑ってないけど。イかれてることを否定されなかったのは自業自得なのでスルーしたが、ふと、気になったついでに聞いてみる。

「ちなみに、本来の死に方というのは？」

「……………」

サツと、目を逸らされたので、電柱にぶつかりに行くよりも酷かったらしい。

ブラツクに勤めていた自覚はあるので過労死とかかな。中学生のノートを暴かれた時のような最期でないことを祈るばかりである。

そんな風に少々思考が逸れていると、んん！と、咳払いされてしまった。

指摘されたばっかりなのに何してんでしようねほんと。

「さて、話を戻しましょうか。貴方の死に方がズレてしまったのは管理世界からの干渉があつたせいですね。あ、管理世界というのは、貴方の世界に隣接する複数の世界のうちのいくつかの事です。」

神達の間でも譲り譲られ、創り壊され、色々と有るのですよ。そして、稀に隣の世界にまで影響できるような力をもって生まれてきてしまう人が居てですね、調整しても追いつかない時が有るのです。

そのまま好き勝手されてしまうと困るので、貴方のように縁をもつ

てしまった方の魂を自我を残したままにお招きし、交渉させて頂いて、お手伝いをして貰っているのです。ここまでは宜しいですか？」

うん。つまり、断ったら次へどうぞーって感じやろ？

選択肢あるのそれ？

「そうですねー、自我の消失は拒否感が大きい方が多いみたいですねー。

でもそれは、私達には理解しがたい感覚なのですよー。」

「せやろな。神様に寿命とかあるかは知らんけども。」

「せやねえです。」

「さよか。というか、ノリ良いですね。」

「ふっふっふ。これでも神ですからねー。」

神様なのに世俗にまみれてよろしいのかなとも思ったがまあ良いのだろうね。守りたいこの笑顔。

そして、改まった様子で状況的には文字通り、魂に問われるように。身体を戻して貰っても、感覚はあっても、どこか抜け落ち、実体とはどこか違うままのおれに、神様は問いかける。

「それでは、貴方の意思を聞かせてください。貴方に結ばれた縁。降りかかった不幸。それらの元凶は未だに健在しています。

ええ、ズルイ言い方をあえてしています。

それでも、その必死に隠している怨嗟を抱えて終わるよりも、この機にぶつけてみませんか？

元凶を倒し、2度目の生を謳歌する気は有りませんか？」

少し違うかもしれないが、要は手をかしてやるから死んだ仕返ししてみろや。終わったらそのまま生きていいから。

って事らしい。

「特典…いえ、お力添えは貰えるのですかね？」

「はい！もちろんです。必ず始末をつけられるモノをご用意します。貴方の知識にある特典というのにも付け足すことは可能ですよ。見過ごせないほどの悪用は控えて頂きますけどね。」

「その元凶とやらのいる世界ってのは、どんなところなんです？」

「それはある程度いじることが出来ますよー。イメージが定まっていなければならぬので、私達はよくあなた方の世界の創作物をお借りしています。テクスチャを被せるイメージと言えば分かりますかねー？そして、元凶を倒さないかぎり、必ず仕様を変えてもその世界のどこかしらで現れるのが、貴方の敵となる者です。世界の仕様によつては、その者の姿形も変化しますね。」

「申し出を断った場合は？」

「記憶や自我を消してから通常どおりにまた流れに組み込ませて頂くか、望むのならばここでその怨嗟と向き合ってもらっても構いませんよ。時間だけは膨大ですから。」

「ここや神様達のいるあの世ってのと、向かう世界ってのはどっちが刺激的ですかね。」

「比べるまでも有りませんねー。ここは止まっていますから。ですが、私達がいくらか調整しても世界は自由に動いています。だから世界はいくつもあるのですよ。」

「神様が直接手をくださすというのは？」

「ふふっ。それは有りません。私達が直接的な介入をするのはご法度という暗黙の了解なのですよ。…でも、貴方の懸念はそこではありませんよね？」

やっぱりなんでもあればらしい。

そう、さつきも隠してるのがバレたらしい。

俺はそこまで短気でもなかった筈なのだが、その元凶とやらに、憤りを感じている。

どうして顔も名前も世界さえも違う相手にここまで怒れるものなのか自分でも不思議でならない。

間接的に運命的なものが変わってしまったとしても、そいつに直接殺された訳でも厨二ノート公開された訳でもないのだ。

神様が何か細工した訳ではないだろう。目線で確認してみたが、首を振られた。

嘘なんて見抜ける訳じゃないが、それは何故か信じられる。

「大丈夫です。邪魔は致しません。思う存分ぶつけてくださって構いませんよ。」

手伝いはしますけどねー。と、クスクス笑うロリ神様。

そうか。それなら安心だ。

薄く口の端が上がるのを自覚する。

すると、神様もよそをむいてくれた。

読もうとしなければ、と言っていた通りなのだろう。有難い限りだ。これは聞かせられないな。

そして、暫くして俺の黒々とした考えがまとまったのを察して、神様もこちらに向き直ってくれた。

「聞くまでもないですかね？○○さん。最終確認をさせていただきますがよろしいですか？」

名前を呼んで確認された。もう決定なのだろう。
だから、おれも誠意をもって答えるでしょう。

「はい。」

「それでは、お聞きします。

転生し、貴方自身の片をつけに行ってもらえますか？」

神々しいオーラを纏い、分かりきった答えを聞いてくる神様。

ならばこそ、俺も挑戦的に、獰猛な笑顔を浮かべて、勢いよく応えた。

「断ります!!そんなことより神様と一緒にいたいです。」

「……………へ?」

俺の答えにぽかんとした顔を浮かべた神様。そんな顔も可愛らしい。

「…え、ど、どうしてですか!?あんなに決まった様にしていたのに!」

「いえ、確かによくもぶっ殺してくれやがったなあんにやろうって気持ちも大きいですが、神様可愛すぎてやばいんで、ぶっちやけどうでもよくなりました。でも、記憶とか消えんのも嫌なんでここに居たいです。ここで自分の怒りと向き合ってもいいんですよね?確か。」

「どうでもいいって…いえ、そんなはずありません!稀に血涙を流しながらも消えることを望む人もいますけど、貴方は聖人君子や理性の桁が異なる人とは違いますよね!ここに呼び出す魂は抑えられない

大ききの未練を抱えている人です。なのに、ここに残るなんて…いえ、本人が望むのでしたらそれをこちら側から却下することはできませんが。」

「そうですか！そうですか！やったー！美少女と一緒にだあー！という訳で神様好きです！結婚してください。」

「っ…好きって私神様ですよ?!ここにどどまっても人間では耐えられませんから！それに、貴方は、やり返したいと思うのでしょうか？」

「ええ。マジで腹たちました。」

「！そっとうでしよう？でしたら！」

言われたとおり怒りが自分の中で渦巻いてるというのだろうか？取引先で殴りたいと思っても必死こいて顔には出さないようにしている時のように、胃がキリキリしている気がする。

「でも、やだー。ここにいたいー。」

「大人がバタバタしないでください！駄々っ子ですかあなたは！」

「違うもーん。ロリっ子の紐だもーん。」

「言ってること最低ですよ☒なんですかもーんて、そして誰がロリっ子!？」

私のパーフェクトボディに向かってなんと失礼な！と、プリプリ怒る神様。

知ってるかい？この子神様なんだぜ？びつくりだよ。

めっちゃ可愛い（真顔

ほら、愛は勝つって言うだろ？
いや、臭いこと言った。すまん。

怨嗟？いや、うふふくって笑った時に浄化されたよね。

可愛いは正義なのだ。

そして、ちよくちよく好きって言った時のリアクションで分かったのだが、この神様、チョロい事務員の気配がする。

きつと今までの受け答えも、セクハラ対策もマニュアル通りなのだろう。

しかし、直接的な好意には慣れていないと見た！

それはそうだろう。復讐(笑)に燃える相手が下心…もまああるが、ほぼほぼ善意的な気持ちで好意を伝えてきたりはしなかっただろう。

だけど、俺は紳士だ。YESロリータNOタッチ。

現状困らせているのが俺というのが頭に痛い問題だが、それもいずれはどうにかしてみせよう。

何より、この神様。苦労人の気配がする。

ならば、放っておけまいて。

本当に紐になるつもりなど微塵もない。

人間には耐えられないと言っていた。それは、神様自身もここも少しは退屈だと感じていることに他ならない。

ロリっ子の顔が曇るのは良くないのだ。

姿が違っても個人的にこの神様の人柄は気に入った。

幸せにするなどと傲慢なことは言えない。

だからせめて、精一杯笑わせてからくたばってやるとしよう。その後が余計に退屈になるだけだ？

ふはははは。甘いぞ三下が。

例え俺の精神がすり潰れるのが先だろうが、それまでに彼女の価値観をほんの少しだけ変えてやるほど楽しませてみせようではないか。娯楽に勝るものはなし。

「神様!!!」

「はひっ。な、なんですか。」

「必ず君を笑わせてみせよう。だからしばらくよろしくたのんます。」

よし、先ずはどうやって攻略しようか。

甘やかそうと思っただら骨抜きにされた

やあ、どうも。

忘れられているだろうけど、自己紹介でもしようかな。

私だ。

「貴方だったのですか。」

暇を持って余した

「神と人間の」

「遊び」

てなこと、今日も俺のいきなりのフリに対してもノリが良い神様と一緒にいます。

金髪美少女と半同棲だぞ？羨ましいかね。

「怒りますよ？」

あ、ごめんなさい。ほんとすぐ調子に乗ってしまうもので。申し訳ない限りです。許してください。何でも……は、身の危険を感じるのではありませんけど。

「貴方もう死んでますけどね。というかここ私達しかいないじゃないですか。」

そうでした。

「おやおやー？ということは、私の偉大さに恐れをなしたということですね。ええ、それは仕方ないことですよ。私はこれでも正真正銘、神なのですから。ですから、貴方の気の迷いも許しましょう。これから、自身を見つめ直して次の世界へ行くというのであれb」

(それは) ないです。

「即答しないでくださいよ。」

というか、神様からの攻めだつたらただのご褒b…もとい、私は甘んじて受け入れましょうとも。ですから、さあ、罪深き私に神の鉄槌を。

「するわけないでしょう…：それに、貴方喜ぶんですもん…嫌ですよ。」

「お願いします！今度こそ何でもしますから！」

「ならば、転生を。」

嫌です。

「またですか (諦め)」

と、俺は今このように比較的自由に暮らしております。神様からすれば、いきなり妙な居候が増えたように感じていると思うのだが、実行使で追い出そうとしたりはしてこない。というのも執行力を持った神様であれば招かれた魂の持ち主の事情などお構いなしに転載させてしまうような神様もいるように、自分の怒りと向き合うという名目で留まっている俺のようなものを、本人が望まない限りは追いつけないというのは、絶対的な規則ではないらしい。いわゆる、どんな魂にでも優しく接しようぜみたいな慈悲深き神様達の決め事らしい。

つまり、ということは、だ。

うちの神様超優しい幼女で、幼女ちゃんマジ神様ってことだな。

いや、流石にまだここで俺に愛着湧いちやって追い出せなくなっているとか、脈ありなんじゃないかウハーとか、思ったりはしないからな？

生前の学生時代ならまだしもねえ…。

偽のラブレター…公開処刑…う、頭が！

それにほら、善は急げ、恋はいつでもハリケーンとも言うけどな、考えてみてくれ。本人曰くいくつもの世界を、俺がいた世界の地球が生まれる前よりも早くから見守ってる相手だぞ？焦って攻略しようとしてどうすんねん。例え神様がマジチョロインでウブだとしても、文字通り年季が違うわ」

「途中から声出てますからね？心を読むまでもないとはこのことですよ…。」

え、マジですか。きゃー、人の心を勝手に読むなんて…神様のえっちゅ。

「気持ち悪い声出さないください。慈悲深い私でも生理的嫌悪はあるのでしょ？」

神様最近遠慮がなくなってきましたね。

「貴方がいろいろとやらかすからでしょう！それに、貴方は強制執行しようとして落とした瞬間に勝手に這い上がってきちゃうじゃないですか！普通ありえませんか？逆にどうやってるのか教えて欲しいんですが。」

愛の力です（断言）

「はいはい。分かりました分かりました。」

チョロかった神様が塩対応になってきてしまった件。まあ、それなりに一緒にいるからねえ。日付の感覚とか無いけど毎日のように口説いてればそりゃ慣れるか。と言っても若干の耳の赤さは隠せてな

いのがとてもキュート。

先程神の慈悲深き故にここにいられているとほのめかしたが、神様も言っていた通り、俺も何度か強制執行（転生世界行き落とし穴）をくらっているのだけど、凄く頑張って穴が閉じる前に戻ってきている。

あ、勘違いしないようにな。凄く頑張っても普通は戻れませんことよ？

俺の場合は、ある取引をしたために堪えられているに過ぎない。

せっかくだからお伝えしようかと思うのだが、神様が思考を読んでいる感覚がする（最近なんとなく分かるようになってきた）。

こんな時はあの手を使おう。

~~~~~※閲覧注意

（神様可愛いマジ可愛いよ。神様可愛い世界一可愛いよ。さらさらとした金髪なのに頭を撫でるとふわふわしていて、ツボを押すようにするとほにゃっとした顔を浮かべてくれて心がびよんびよんするんじゃない。そして、いつもは外見にあったくりくりとした目と姿から幼い感じがするのに真剣に話す時はキリッとした凛々しい目つきと神様オーラになるから凄くギャップ萌えだし。他の神様や悩める魂達の頼みを一生懸命に解決してあげようと頑張ってる姿も魅力的だし、一心地入れようとだらけているときに耳をふつとするととても可愛い反応してくれるし、左右で感度が違う羽のブラッシングを頼み込んでやらせてもらった時は他人に触られる気恥ずかしさと普段手が届ききらない部分を丁寧に撫でられた感触で蕩けそうになった顔を隠そうとする自制心が混ざったような顔が愛らしいし。仕事で神様だけ離れた時になんだかんだと気を遣ってくれ、演技だったのに必死にあやそうと母性を垣間見せてくれた時には思わず尊すぎて泣きそうになってしまったし、帰りにはお土産として飲食も必要としない俺の分までコップを買ってきてくれたし、同じものだったからお揃いで



と発する言葉との差によって冷静にもなるし余裕が生まれる。ん？  
そもそも種族にしろ存在にしろ概念的なものにしろ神様なのに、なん  
で心理戦挑めるんだろうか……。まあいいや。

だが、俺はアホなので思考とか口からダダ漏れだし建前とか考えら  
れるほど器用ではないので全部本心である。

自身の変態性すら隠そうとしてないがそれ以前に紳士(笑)なので、  
問題ない。

これぞ、素直な思いでちよろい神様褒めまくって思考読ませないよ  
うにしちやおうぜ作戦である！

……………悪かったよ。そうですよ。嘘ですよ。作戦とかじゃな  
いよ。始めの頃に必死こいて口説いてたら発見しただけの俺自身に  
もダメージの大きい方法だよこんちくしょう。

さて、話を戻そうか。

えーと、何の取引をしたかだっけ？

それはな、他の神様のうちの俺と同じアホな神様との賭けみたいな  
ものだ。

うちのロリ神様は有名らしいし、真面目で有能だし力強いんだと  
さ。だから、良くリアルに暇を持って余した神様達が話し相手に来たり  
する。昔からそんなやりとりが習慣と化していたのに、そこに新たな  
異物として俺が居るわけだ。

あの閃いた時の様子には思わず効果音つけたくなったよね。ピ  
キューン！って。

それで俺の裏表の無さすぎるアホさとうぶな神様とのやりとりを

ニヤニヤしながら賭け始めたわけなんだが、俺よりも付き合いの長い他の神様も、いじりすぎて怒られた時に苦い経験があったらしく、俺が気まぐれで簡単に消えてしまったら面白くないらしく、加護やらなんやらくれたわけだ。

そして他の神様達は生物的感情とかのメーター全て傍観して楽しもうとする欲求に振り切っているので瞬く間に広まっている。

ものっそい長いスパンで攻めるんやぞ！ってアドバイスまで貰えた。人間なのに大変だねえ。飴ちゃん食べえ。みたいな反応も多かったのでマジで俺の精神が持たない可能性あるんだねえ。まあ、そこはもともとイかれた我が魂。なんとでもなる。

因みに、この前拘束されて落とされた時の怒らせた原因は神様のプリンを間違って食べてしまったことに起因している。

ほんととは、プリンアラモード風に仕上げてサプライズプレゼントする為に別のところで冷やしといただけなんだけどね。

怒らせた俺が悪いのだけど、怒った顔も可愛かったです、まる。

俺の学んだ教訓は、例え食事の要らない人がいても、食べ物の恨みは恐ろしいということである。

「そこまで食いしん坊じゃありませんから……。」

あ、おかえりなさい。ところで、この間いただいたお菓子あるんですけど一緒に食べませんか？

「良いんですか!?是非食べましょう!」

決してお菓子で釣ったわけじゃないよ?神様パワーがある上に逆らおうとも思わないけど立場的にある程度命令はできるはずなのに、普通の幼女みたいなたたりがぐうかわだよね。

そして、取り出したるはあの棒状の有名な菓子……風に、貫いものに俺がチョコでコーティングして作った○ツキーである。

はい、神様。あーんしてください。

「なんで貴方が啜えてるんですか……？」

一緒に食べましょうって言ったじゃないですか。

「もぐもぐ言ってるだけなのに心が読めてしまった自分の能力が恨めしい……!!」

大人のれでいーならば嗜みですよ？ほら、チューはしなくても良いですので折って食べましょう!!顔が間近で見れるだけでもはや昇天するほど儲けものですから。

「仕方ないですね……はあ……。」

そして、伏し目がちなままポキッと啜えて中程で折って食べてくれた神様に感謝しながら後はふつうに残りを頂いていく。

お菓子好きなのかムフーっとにこやかに食べている様は癒やされますね。ハイ。

そうしてしばらくポキポキとした音だけが響いていたが、最後の一本になった……のだが、この流れるに俺はジャンケンとかになるだろうから、その時は負けても勝っても譲ろうと思っていた。

しかし、ここで神様から思わぬ一言が飛び出した。

「……最後ですから。もう一回ゲーム……しませんか？」

いや、ほんとこの時は、ツツツ!!!いつの間に高等テクニクを?!っ

てなりましたよ。だって、上目遣いで首かしげて○ツキー啜えてるんだよ？金髪美少女が。

思わず、何故か過去形の口調になってるけどあと語りでもなく現在進行形ですからねこれ。

うん、ヤバイ（破壊力

当然オツケーでございます。

「よし、それでは、はいあーん。」

あーん。

「ひゃあく、ふゆえてくらしい。（早く啜えてください）」

喜んでー、と、啜えてみたのだが、何故か折らない神様と見つめ合う。

俺的には眼福なので構わないんだけど、なんで固まってんの？

と、思っていたらポリポリと端から削り始める神様。

その表情は悪戯つ子のソレだった。

コレはアレですね。限界まで食べたなら残念でしたくってやるやつですね分かります。

仕方がない。無理やりそこで唇奪うほど鬼畜でもないし、好感度高くねーわい。どうせこれも読まれてるだろうから、平常心平常心。

10センチほどあった菓子も両側から食べれば早いもので、5センチ、3センチ、1センチになり、なんか負けるの悔しいので先に折ってやろう、と思いつながら最後の一噛みをした。

そのほんとに直後の一瞬だけ、ちよんつと、何かが口に当たる感触がして、

「えっへっへ。私の勝ちですねー。」



と、はにかむ神様の顔を見て、虚勢を張り続けていた俺の意識はそこで限界を迎え、鼻から愛という名の血（イメージ）が噴き出す錯覚とともに、ブラックアウトした。

気絶して目が覚めた時にはまたジト目に戻った神様がいたので、気絶してる間に落とされなくて良かったーと安堵しながら、神様でも成長するんだなあ、実感した出来事だった。

「いつも、負けっぱなしの私ではないのですよ……は、初めてでしたから……。」

責任……は、まだ分かりませんが、もしも貴方が……その時は……。」

## 無駄な抵抗

おっひさく☆待たせちゃってめんごめんご。

え、待ってない？キモいからやめろ？

またまた照れちやつてく……照れ……だよね？

あ、そうですか……なんか、すみませんでしたね。あ、いえ気にしないでください。私が悪かったんですから。ええ、それでは……。

ぐすん……

「何、一人芝居して泣いてるんですか。哀れすぎてこっちまで悲しくなるのでやめてください。」

神様……!!

「うわっ！ちよっ?!抱きつかないでください！」

うう………昔の悪夢がフラッシュバックして……うわあああああ  
あん!!!

「いきなりガチ泣き!?!……はあ、しょうがない人ですわね。よしよし、大丈夫ですよ。貴方はもう死んでますからねー。」

あんまり嬉しくない慰めだあ……ぐすん………すんすん……えへへ。

「ほら、さりげなく嗅いでないで泣き止んだなら離れてください。お仕事再開しますから、行きますよ。」

情緒不安定なんですから……まったく。と、眩きながらもさりげなく、ぽつねんとしていた俺の手を引いて歩き出す神様。

本日もいい歳して何やってんだか分からないアホに対してもとて

も優しい幼女様でございました。

さて、初っ端からすまんね。少しばかり現実逃避していたら涙腺が決壊してしまったようだ。

感動してではなく虚しくなってくるタイプで……。

はいはい、俺の自滅は一旦置いておいて、と。

神様がさつき言っていた通り、最近俺は、神様のお仕事の一部を手伝っております。

いや、冗談でなく。

人間なのに神様を手伝えるのかって？

うん。そこは、仕事にもよるんじゃないかね。素人にだって整列の号令をかけたりはできるでしょ。簡潔に言えばは、待機列を移動させるようなもんだ。

はい、手を挙げてついて来てくださーい。って、お仕事モードの神様の元までよく分からない形の魂なんかを案内したりしている。

な？あんまり難しくないでしょ。他のことは追い追い話すとしてよらかな。気が向いたらだけど。

もちろん、神様は他にもいろんなことしてるからな？迷える(?)魂を導いたりするだけではない。

俺には教えられないものもあるのだ。

ぶっちゃけ神様が本気出すと時間とか無視できるから俺何にもできないからさ。今のデフォっぽい状態(なのか?)で落ち着いている時が多いから割と気分次第みたいだけど。

あ、手伝いを申し出たのは俺からだ。言っておくが、日がな一日神様に愛を囁く（邪魔）だけではないぞよ？ちゃんと自分とも向き合っている。

そして、毎回深く考えた結果、ここに残りたいと思うのです。

いやいや神様、貴方を口説く（邪魔）だけが俺の仕事ではないんですよ。役に立つちやいますよー。って、言ったらしぶしぶだったけど許してくれたんだよね。

他の魂の在り方を見て考え直すのも俺にとってはいい薬らしいってことで。

恨みつらみを抱えた奴とか結構いるから実際思うところがあつちやある。

それでも此処が良いと思えるのはやっぱりバタ惚れだからかなあ。やだ。俺すごくチョロいじゃん。なんてこった。これじゃ神様のこといじれねーよ。

…くそう。それもこれも神様が可愛いすぎるのが悪いんです。私の心を弄んで！いったい何が目的なの！身体？身体が目的なのね？くやしい、でも心開いちゃう。

「良い加減にしろやコラ」

神様、口調が別人になっております。

「黙って聞いていれればどこまでも身勝手な！」

全面的に俺が悪いので落ち着いてください。ブレてますブレてます。

静まりたまえー！いったいなぜそこまで荒ぶるのか！

「一回、吹っ飛んでください。」

きらーん

謎パワーで吹っ飛ばされてから戻ってきました。ふざけすぎたね。

「……私思うのですよ。」

何をです？

「貴方がその…留まる理由が不本意ながら私にも責任があるようですね？」

はい。神様の魅力にメロメロです。千の言葉でお讃えしたい所存です。

「結構です…。えーと、ですから、私の容姿が大きな要因の一つのようですので、貴方の好みの外見から外させてもらおうと思います。」

え、さらに変身できるんですか？

「ええ。私の辞書に不可n…もとい無理という言葉は載ってないのですよ。ふう…危ないですね。危うくいろいろなところから怒られてしまうところですよ。」

神様なのに何をお気になさってらっしゃるのか。てか、神様の辞書って何です？聖書？黙示録？禁書目録？

「最後!!あ、いえ、普通の辞書ですよ。最近の人間の若者の言葉も勉強しなければなりませんから。全知モードって使うと疲れるんですよー。」

肩をおもみます。おお、結構凝ってますねえ。

「あ、ありがとうございます。はふう…上手いですね。」

これでもおばあちゃん子でしたから。いやー、お仕事モードでキャラを作ってる時って疲れますよねー。一日中接客してた時なんてもう大変でしたよ。

「ええ、ええ、そうですよね!私は文字通り姿を変えたりもしますからなかなか疲れる…って、また話題が逸れてしまいました。ですから!姿を変えます!今!」

ええ…もう少しだけ待ってもらえませんか。頼んでおいたカメラが届くので。

「またいつの間に!? ええい、問答無用です! 変身!」

「コマンド実行じゃ… いえ、なんでも。」

そして、久しぶりにピカーって変身してスレンダーな美人さんになった神様がそこに。

「ふふん! どうですか! いつもと違う私です!」

おお! めっちゃ美人で可愛いですよ。普段とのギャップを感じています。

「え… 思っていた反応と違うんですが。そこは、好みと違う姿になってシヨックとか献身的に自分の悩みを解決しようとする私に感動して心を入れ替えるとかそんな場面では?」

いえいえ、俺の守備範囲は海よりも広いですよ。

「くっ… 手強いですね。ですが諦めませんよ。とうっ! これでどうですか!」

そしてまたピカッと光って、にや〜んな格好の神様。

ケモミミ! 尻尾! 最高です!

「ぐぬ… ならばこれでどうですか!」

再びピカッと。黄色い電気ネズミじゃないよ? 今度は半透明なスライムさんに。でも美人。

色っぽいです。

「スライムですよ!?! 正気ですか、貴方! ですが負けません!」

俺に対抗して神様も負けじとピカッと3連続。

擬人化怪獣、虫っ娘、男の娘。  
うん。なんの問題もないよね。

「人間じゃないのに!?!というか、性別違うんですが……。」

男の娘は有りです。そして俺は死んでから肉欲に駆られることも  
ほぼ無いので一緒にいるだけならマッチョでも構いませんよ。中身  
が神様なら大丈夫です。

「まるで悟りきったような表情を?!これじゃ、私のわがままみたい  
じゃないですか。…いいえ、ここは引けません。こうなったらあの邪  
神軍に似た姿であればもう目を向けたくもなくなるでしょう。私も  
嫌なのでなるべく使いたくない手段ですから。観念するのですよ!」

ナ、ナンダツテー。

「軽口もここまです。とおっ!」

そしてピカツ……ではなくこう闇をブワツてさせたような黒い煙  
が広まって、ジョジョに収束。いや、スタンドでも波紋使いでもない  
よ。徐々に、ね。体感1分くらいで俺の5倍くらいの大きさの神様が  
居た。

いや、ごちやませすぎない?トッピング全部乗せみたいだよこれ。  
触手にクラゲみたいなボディの部分とか植物部分、縦に割れる口とか  
黒目とか赤目とか沢山。ついでに、声が漏れててヴォンヴォンとバイ  
クの音を聞いているみたい。

「ブワワワワァー!■■■■! (さあこれでどうですか。近寄りた  
くもないでしょう!)」

言葉通じなくなっちゃったよ。だいたい何言ってるか分かるから



いいけども。はあ……。

ちゃんと伝えなきゃいけないと思ったのでとりあえず近寄って抱きしめてみたんだが、なかなか冷んやりマツトレスみたいで悪くなかった。いや、外見なんて神様にとっては自由かもしれないけど俺は貴方自身に惚れたんです！ってカツコつけようと思ったのに、この姿も悪くないと思えてしまったんだけどどうしよう。

思考が伝わって神様がプルプルし始めたのでまあいっか。

「神様、どんな姿でも、例え貴方が多重人格でも、惚れちゃったんですからどうしようもないんです。諦めてください。………どうしても俺が嫌ならばすぐに消えますよ。転生か消滅かは気分次第ですけどね。でも、神様を悲しませるためにここに居たいわけじゃ有りませんから。」

すると、ポンつともとの幼女に戻って俯いてる神様が。

うん。やっぱりこの姿がしっくりくるな。短い付き合いかもしれないけど、偶に笑ってくれた時の神様が一番好きなのだ。

「……馬鹿です。貴方は。」

ええ、存じておりますとも。

「私も……ですかね。」

そんなことないですよ。悪いのは全て俺ですから。

「……まったく、しょうがない人ですね。」

はい。……迷惑おかけします。

それで、何故今更無駄に頑張ったんです？

「このままでは良くないと思ったので…。」

そうですか。なら、俺を洗脳でもしたら良かったのでは？姿変えるのが面倒なら俺の好みを変えれば良かったんじゃないですか？

「……それは…駄目です。」

そんな規定みたいのありましたっけ？

「いいんですよ!!気にしないでくださいー!」

あ、ハイ。

(これでも気に入った魂ですからね。そのままの形でいてください。)

「あ、それと今回の貴方の恥ずかしい台詞は他の神達に伝えておきましたから。暫くはそれで弄られてください。」

そんな!?

## サプライズ仕掛けたら逆に嵌められた

相変わらず居座っております、私です。一人称ぐらいハッキリしろやボケエと作者にツツコミながらも俺は歩みを進めています。

正確には同じルートをぐるぐると回っているだけなんだがな。魔法陣は描けません。俺も心はいつまでも少年だと言いたいところだが、無理があるよな。外見というか精神というか流石にいい歳してハートマーク描いて眺めてたらキモいだろ…。

いや、話は好きだから！王道も大好物だから！あくまで俺の場合な。

ん？神様に対してだったらよく攫われる事で有名な姫様の全身ピンク色のドレスにフリフリと真っ赤なハート両手に持って突貫できますが何か？

ヒール履いてティアラ載つけるぐらい訳ないぞ。

羞恥心なんてもんは乙女回路の前には紙切れ同然よ！

こうね、お花畑で花冠なんか作っちゃってな、どうぞくって頭に載せてくれる訳だよ。それで一緒に寝転んで空見上げながら手なんか繋いじやったりして…………… (≡▽≡) キャー

「あの、儂忙しいんじやが…………。」

妄想してたら、俺がぐるぐるしてた中心で書類仕事してた爺さんが苦言を呈してきた。

ちなみにこの爺さんも神である。うちのロリ神様が仕事で暇な時にこうして他の神様のところに遊びに来たりしてる。

「あのな、儂もお前さんに悪ノリして加護与えたりしたけどもな。いちよう儂も立場ある神なんじゃが……なんで、というかどうしてお前さんはアポ無しでここに來れたんじゃ?」

暇だったから頑張つて氣を探つてみた。

「お、おう。そうか。それでこれるもんなのか? いや、まあいいわい。暇なのは分かったが、儂も仕事あるからぐるぐるされると氣が散るんじゃが。」

とか言つて本当は暇してるんでしょ。

「いや、この山が見えんのか? 明らかに暇ではなからう!!」

ハイハイ。分かります分かりますとも。従者の天使さん真面目そうな人でしたもんねー。いかにも、仕事してて真面目な上司の体の方が受けが良いんすよねー。もう判子押してある書類ペラペラつとね。うはははは。

「そ、そんなことはし、しとらんわい! 適當抜かすな!」

そうつすね。そんなことはしてないんですよねー。でもちよこつとペース落としつつか残り数枚をゆつくりと悩みながらもやつてますよー。だから追加は要りませんよーアピールですね分かります。爺さん神なのに分かりやすすぎワロタ

「早く帰れえええええええええ!!」

うん。流石にいじり過ぎたかな。でも騒いでたら天使の人来て必死に言い訳してたところ見ると凶星っぽいんだよね。

あ、俺はよくこんな風にいたずらしてる訳なんだが、流石は神ってところもあってな。一生が1000年程の人間と違って神様達は気の遠くなるほど存在してるからものすごく気が長いというか器が広いというかね。

人間どうしだったら軽くコロシムになってそんな問題でも、次会うくらいにはケロっとしてカラカラと良い刺激だったなんて笑い飛ばしてる連中だ。

敵わないなあと毎回思うので信仰？とやらが僅かに見て取れるだけで好きにやらかしてくれて構わんとまで言ってくれる神もいる。逆もまた然りってのは言わんでも分かると思うけどな。

意外な事に神様どうしの鬪いはあるらしいけど、人からの信仰とか気にしない神様もいるらしい。そういうのは少数派なんだそうだ。

元の世界の神様のイメージ的に信仰なくなったら消えちゃうからいろいろとやってそうなんだけどね。

むしろ降りてるから根本から定義が違うとかなんとか言われたがサッパリ分かん。

さてと、それじゃあ、爺さんのところにも手紙を置いて来たのでそろそろ気付く頃だろうし準備を始めようかな。

サプライズの準備を。

何故かって言うと、神様が仕事から帰ってくるのを毎回ただ迎える

だけじや味気ないと思つてな。

最近は何も神様も慣れてきたのか分からんけど「誰かが迎えてくれるのは少し嬉しいですね」なんて可愛いことを言ってくれてたのでそのままでもいいんだけどね。

長い付き合いだからこそ自然と毎度交わすうちにお決まりとなつたやり取りとかつてなんか良いよね。

例えば、

おかえりなさい神様。

「ただいまです。」

今回はどうでした？

「いつもどおりでしたよ。」

そうですか。

「はい。貴方は何かありましたか？」

いえ、いつも通りでした。

「そうですか。」

ええ。

んで、ふふふつなんて笑いあつちやつたりしてな!!!

コホン。とりあえず思い立ったがなんとやら。

つつても他の神様に頼んだのは神様の気分次第な此処の景色を代わりに変えてもらつて俺と一緒に疲れくつてクラッカーでも鳴らす感じで迎えて欲しいってことなんだけどな。

気の良い人だからからむしろ俺よりも喜んで引き受けてくれた。やっぱりうちの神様は人気なんだなーってこういう時に思うと嬉しくなるよね。

お礼は俺単体でもう笑いの種になつてるから要らんと言われたが、今度手伝えることをするつてことで。

あ、そうそうそんな感じでオネシヤース。

イメージは扉を開けたら綺麗な青空と草原を一望できる白雲と太陽に近い丘です。貧困ですまんね。

幻想的な空間になったので感動しつつ他の神様に教えてもらってもうすぐ帰ってくるらしいので扉の前にスタンバイ。

神様は自由に扉移動できるし作れるんだけど、こだわりっぽいのかこの大扉から帰ってくる人が多い。

俺も基本ここで待ってるからすぐにおかえりなさいって言えるから分かりやすく助かるんだが、気になったのでなして？って聞いてみたらもによもによ口ごもったのが珍しくて可愛かった。

神様のイメージ的なもんかな。

と、思考は切り上げてと、合図がきたぞー！

よし、それじゃあステンバーイ。

GO！

~~~~~

はい、それではここからは初めての私のパートですよ。驚いてますね？うふふ。

side神ってとこですかねー。

先にネタを明かしておきますと、これぞ逆ドツキリというのをやってみたのですよ。

彼が私に何か仕掛けようとしたのは出かける前のソワソワで気づいてましたしねー。これは何か企んでますねーって。分かりやすい人です。

因みに、私が仕掛けたのは機嫌が悪いのを装って、はて？なんというのでしたかね。めんへら？やんでれ？とか言うんでしうか。

うう…ややこしくはないですか？若者言葉というのは。また辞書を開かねばなりませんね。

クラツカーを鳴らして迎えてくれた彼に、昼ドラばりの台詞を言ってみました。

おお！とても驚いてますね。これは仕掛けた甲斐がありました。

いつもは私がびっくりさせられてばかりですから。仕返しも込めています。まったく…油断も隙もなくへらへらと齒を浮くような台詞を言うんですから…。こつちがどれだけ…。

何も言っていないです。イイですね？

ええ、素直が一番ですよー。はい？私もですって？何を言いますか！私ほど素直で純粋な神も居ないのですよー！

おちよくってくるのは一人だけで手一杯なんですから。きちんとしてください。

それにしても綺麗な景色とお出迎えには正直感動してしまいましたねー。

お礼を言いたいところですが今回は仕掛け人に徹します。

ふふ。それにしても何も悪くないのにこうして慌てながらも私を宥めようと誤ってくるとは…。

人間らしい人です。

一喜一憂というものはやはり新鮮である証拠ですから。眩しくも思えますね。

このまま暫くいじめていてもいいですけどね。慌てすぎて彼の目が回り始めてますから。そろそろ許してあげましょう。

悪趣味かもしれませんが、慌てる顔はちよつぴりまた見たいと思つてしまいますね。

~~~~~

はい。俺です。  
あかんですたい。

神様激おこぶんぶん丸かな？

すごく機嫌悪そうにしてたところにクラツカーなんて鳴らしちゃつたものだからジト目通り越してギロ目？

結構ドスの聞いた声で、「あゝ？」というね。

ヤバイどうしよう。嫌われたらもう死んでるけどもつかい死ぬしかないよね。

とりあえず切腹して謝罪をするしかないのか！自由の女神！違うそれおうさまや！落ち着け俺。

状況説明ととりあえず謝ろう。

こういう時は俺が悪いと相場が決まってるんだ。なんせここ二人しかないからな。

正確には一魂と一柱か？

「神様の状況も考慮せずに勝手なことをしました…。ごめんなさい！他の神様達には俺から協力を頼んだんです。ですからどうか…。俺が悪かったです。本当に申し訳ありませんでした！」

「また…。ですか。」

ん？神様が俯いてなんか様子がいつもと違うぞ？子供っぽくムキーンと怒る感じじゃなくて…。

「なんで…。どうして貴方は私以外に頼るのですか!!」

そこ!?そこなんですか！

「貴方は私と共にいたいと言いました！ならば何故私以外の神と一緒にいるのですか！私を頼ればいいでしょう！それとも頼りないとも言いますか？仮にも神である私に向かって。貴方がそう言うのでしたら神としての本気を見せてあげましょうか！一時を大切にしている人間なんてなぞらえたままでは不満だとも言うのならそれも構いませんよ！それとも神であれば誰でもいいのですか？いつもの姿に騒いでいたのはただの媚びで女神に会って鞍替えですかそうですか！それとも気の合う男神の方が良かったですか!?楽でいいでしょうね。でしたら行けばよろしいのでは!?私は止めませんよ？」

…ヒステリック気味に叫ぶ神様。他の神様をチラツと伺うと既にいねえ…。

うーむ、普段ならこんなこと絶対に言わないのはわかってるからこうして考えてられるけどシヨックはでかい。

嫉妬？独占欲？いや、今ふざけてる場合じゃないから。

流石に弁えろよ俺。何かあったんだらう、そんで色々と寂しがり屋な面が暴走でもしたか？

神様にとっての人心回路は取り外し可能な面があるけど、でもそれ

でも人の一時を尊いと言つてた神様だから惚れ直したんだ。

あ、もうマジで涙腺がやばい。

「そんなこと有りません！貴方が良いんです！何て言えば良いのか、何があったのか分かんなくて……でも、すみません！あ、えーと、ごめんなさい！ゆるじでくれなくても構いませんから、反省しますから！どうか、うぐつ、うえつ」

声が出てこない……どうすりや、うぐぐぐぐぐ

まあそんな感じに俺が内心テンパリすぎて限界迎えていると、

「ふふっ……あははは。ごめんなさい。でも何で貴方が泣くんですか。」

突然神様が笑いだしたので下げていた頭を上げて見て、俺目ん玉飛び出すかと思つたね。

消えた他の神様達がプラカード持つて笑つてんだもん。

「ドツキリ成功ですぬ。」

と言つて目にしていたメイクをシュワつと消す神様。露わになるいつもの可愛いお顔。

「びつくりしましたか？」

ふふつと笑いながらパチつと指を鳴らすと想像よりもひどかった俺のテンパリ具合が空中投影される。

やめ、ちよ、やめてください！見ないでえええええ。

サムズアップしてる爺てめえは許さんぞ。

「それに忘れてるようですから言っておきますけど、貴方の心の中聞こえつぱなしでしたからね？」

え、あ、はい。

「なかなか嬉しいことを言っていただけましたからねー。今回はこれで許して上げましょう。それに考えながら心で泣くとは器用ですね。それにサプライズ（ドヤア）ってなんですか。ふふふっ。」

……………今だけは弄られても嬉しくない。

「駄目ですよー。暫くはまたおもちゃです。」

神様のいじわる。

「ふふん。神ですから！」

こんの、ロリっ子めが！頭撫でくりまわしてくれるわ!!

「照れ隠しですね分かりますよー。はいはい。泣き止むまで私があやして上げましょうかー？今なら膝枕してあげます、なんて。」

是非お願いします!!!

「泣き止んでるのでアウトです。」

神は死んだ!!!

「残念、居るんですねー。ふふふ。」

「「「爆発しろ!!!」」」

やはりその幼女に惚れ直した

どうもおひさしぶりです。

ここのところ神様が笑ってくれなくて思い悩んでいる今日この頃。そのせいなのか、デフォは殺風景なこの景色もどんよりとした曇り空のような空模様が配置されております。

今現在俺は神様を膝の上に乗せておりますが、まさかの無反応という悲しい事実に固まっております。肩をお揉みするだけで可愛らしい反応をしてくださっていた我が幼女様はいずこ？

「……………」

無言です、はい。聞こえてらっしゃいますよね？

「……………」

…うーむ。読まれていたらなんとなく分かる俺でも判断つかないとは。

それはそうと、座って膝に乗せている状態ということは当然腿の上には嬉しい感触を感じているわけだし、とつてもフローラルな香りが鼻腔をくすぐっている上に、顔がふわっふわの羽に包まれているので蕩けそうのごぎる。つまりはここが天国だったの？

あ、羽引っ込んだ。やっぱり聴こえてたんですね。

「……………」

あ、ちよ、痛いです。すねを蹴らないでください！一体どうしたと  
いうのです？

「……………何でもありませんよ。ふんっ！」

と、まあ、こんな感じになったのが体感的には数日前くらいかな？突然黙り込んでしまわれた。正確にはもすこし短いかも知らんが、なんせ魂ですから。睡眠とか偶に気が向いたらうって感じだから日付の感覚とか曖昧なのよ。あの納期までが残りどれくらいかしか時間の感覚の無い会社に通ってた時よりも日付感覚が無いあたりお察しだ。精神的には天と地…いや、まさに天国と地獄ぐらい違うけど。そして稀に顔を上げてはソワソワとしてみたり。かと思えば沈むようにうなだれてみたり。

数日続く……不機嫌(?)……どんより……。!!つまり、あの日か!?

「うぎゃああ!」

太ももを思いつきり抓られてしまった…。(涙目  
失礼なことを言うからですよ!と目が語っておられる。違ったよ  
うなのでもう一回。

落ち着きが無い……何かの予定を期にするような様子……浮き沈みが激しい……。ふむ……。ここで更年期障害?とか言うともた抓られてしまうので言わぬイタタタタ。さつきよりは優しいけど痛い  
です。

えー……なんなんだ?心当たりが全く無いぞ?!

神様、何か隠してます?!

「!?な、何も隠してませんよ!」

そうですか、そうですか。ところで神様、ここに甘いものがある  
じやろ?!

「…うぐ。い、要りません。」

ほほう。ならば食べてしまっても問題無いですね？あー、ウマー。

「あ………少しぐらい…」

んー？聴こえませんかあ。美味すぎて手が止まりませんわ。残り一つになってしまいましたよ。フオッフオッフオッフ。

「~~~~~!!!要りませんとも！うわーん！」

「がはっ!!」

ダダダダ〜と擬音が聴こえそうなん勢いでダツシユしていく神様。

突然立ち上がるものだからまさかの俺の顎にクリーンヒットした神様の頭。天使の輪つか？んなもん、羽と一緒に引っ込んだわ。

予想外のダメージにしばらく悶絶していたが、今の反応から候補が2つ思いついたぞ。

わざと無視しようとしてるパターンと歯医者の的なパターンだ。後者は神様なの？って思うが、なるもんはなるらしい。大抵が思い込みによって変化する神様達は一回そうなたら治すのが難しいので、病院とまではいかないが診療所を開いてる物好きな神もいるってこの前言っていた。

というか、この前逆ドッキリやられたんだしむしろ一択だろこれ。太ったような様子はないし。一目見れば例え髪の毛一本だろうが分かるぐらいには神様を視姦…げふをげふん。よく見ている。同居人の健康状態を把握しておくのは当然だろ？

つまり、見た限りでは俺でも分からないってことは無駄に力を使って隠蔽していた口の中って訳ですよ。

真面目だからきちんと治そうとしたはいいけどだんだん怖くなってきたパターンね。分かりますよ。そんなのよくあるある。



さて、原因の検討もついたことだし……反撃の時間だ。ふははっ！

「わー!!? 離してくださいー!」

はい、幼女一名確保です。俺にかかれば朝飯前だつてんですよ。

「何で分かったんですか?! 姿も気配も消したんですよ?!」

んなもん匂いに決まってるじゃないですか。神様の香りだったら雨の日だろうが終えますよ。

「警察犬よりも凄いとか何者なんですか!!」

はいはい。ただの凡人ですよー。もう死んでますけどね。

ほら、暴れないでください。さつきお医者さん来てましたから、怖気付いてないで行きますよー（大嘘

「嫌ですううううう!!?」

大丈夫ですよ、少しチュイーンとすれば終わりますから。痛くない

ですよ。ね？チュイーン……ゴリゴリつと（ボソツ

「最後何か言いましたね!!?痛くないなんて嘘です！人間界の歯医者なんて子供が一番騙されるところじゃないですか！」

あー、痛かったら手をあげてくださいーい。（辞めるとは言っていない）の事ですね。まあ……なんとかなるっしょ、

「雑!!?ほんとに、ちよ、抜け出せなっ、力強過ぎです!!?私神パワー使ってますよ!!?」

俺に常識は（ry

「知ってますよ!!?うわーん!!」

嘘にも気づかないぐらいテンパってらっしやるようになにより。あー、弄るのたーのしーなー。ジタバタしてる手足が普段ならシヤレにならない威力だけど今の俺には通じん。

生きていればきつと、アドレナリンとばーってやつだろうね。

と、そんなこんなをしてるうちにマジでお医者さん（神）がいらっしやっただよう。なぜかついてないはずなのに、チャイムが聞こえるのはスルーしよう。

「ぴんぽーんー!」

だって、口で言ってるんだもん。しかもめっちゃめっちゃ上手い。どうやって声出してんだこの神。いや、神様だから気にしたら負けだ。

「ぴい〜んぽお〜ん!!!」

いや、うるせえわ。

なんだこの人。いや、神。目の前にいるのにまだ言うんかい。長髪の女神様だけど随分と変わってんな。あ、物好きって言ってたもんね。変人でもあったか。

暴れる幼女そっちのけで俺に対してめっちゃ期待した目で見てらっしゃるので、これは返しを待ってるのか？

「〜!!!」

あ、そうっばい。ていうか、今回それ多いな。〜!〜!〜!ってやつ。まさにそんな感じだからいんだけどさ。作者が語彙力皆無なせいだつてツツコミは置いといてね。どうせならこう恥ずかしかつてる美少女にやつて欲しいよね。

今抱えてる美少女も前やつてくれたけど、今は違う理由で顔真っ赤にして暴れたら。このお医者様がロリ神様をチラツとした時はビクツとして真っ青になってたけど俺の方に視線が入ってる今が好機!とばかりにもがいている。

ま、逃がしませんけどね。

ほんじゃあ、ノリの良いところをお見せして、と。

「はぁーい。どちら様〜? (裏声)」

「〜!!!」

あ、若干嬉しそう。

「こ、こほん。私、神掛かり付け医を趣味でやっておりますコノエと

申します。あ、神としての名前は控えていますのでご容赦を。」

にやけてた顔をキリツとさせてペコリと頭を下げたお医者様。改め、コノエ様。おっと、案外マトモな神様なのか？

「ご丁寧にも。意外ときちんとした名乗りでビックリですよ。趣味ってことは置いとくとしても、知り合いの神様達はテンションが天元突破して振り切れてるので厨二チックな名乗り方してましたし。」

「あはは。神ですから。大概是暇してるので娯楽に飢えてるんですよ。」

「……人間と同じようにね。と、言葉を繋げてギラツとした目で俺とロリ神様を見るコノエ様。」

うん。この時点でもうどつかでみたような気がするんだよ。この感じ。

そう、おもちゃを見つけた的な目線。

神様によつては心読まない方もいらつしやるわけだからわからんし、聞いてみりや早いかな？

「えーと、神様と俺のことを知ってらつしやった感じですかね？」

「ええ、もちろんですわ。貴方方は有名でしてよ？」

知らない神達にまで知られているという事実ね。これは、責任重大ですよほんと。神様をきちんと口説き落とさねば（使命感

………通じてねえや。まだもがいてるし。そんなに嫌なの？

「それじゃあ、チャイムを口で言ったのはどうしてなんすか？」

「人間の訪問するときのやりとりなのでしよう？私ずっとやってきたかったのです！他の神達には伝わりませんでしたが……です。魂のまま残り続けている人間がいると聞いてずっと楽しみにしていましたの！ですから、これで良かったですわー！」

若干悲しいことを聞いちゃったよ……じゃあなに？この人ずっと客の訪問治療に行く度に口でピンポン言ってたの？

……こういうのにはなるべく付き合っただけよう。流石に虚しすぎたわ。

「そうですか……。少しでも期待に応えられたなら光栄ですとも。それでは、早速で申し訳ないんですが、そろそろうちの子の治療の方をお願いします。いい加減ジタバタしすぎて疲れてきてるみたいなんです。」

「そうですね。話は後に致しましょう。さ、それではちやつちやつと治療しますわよ！」

「い……や……ですう……！」

胸元から取り出した包みを広げると大きさを無視した機材の数々が。ガチャガチャとした感じの機材は、真ん中に椅子があつてよくある歯医者と一緒にぽい。

ぴい……！って感じで最後の抵抗を見せる幼女様（マジで今日は幼児退行してないか？）を椅子に座らせて固定させる。優しいベルト式でした。

手足は暴れてたけど、コノエ様がドリルをチュイーンと回したらビクツと怯えて固まった。

虫歯確定みたいに準備してるけど見なくてもわかるもんなの☒☒

「便利な目が有りますので。よしなに。」

あ、そういうね。よしなに。

「神様頑張ってください。無事に治療が終わったらソフトクリーム買ってあげますからねー。」

「子供をあやすように言わないでください!!聞きませんよ!」

いつもはお菓子で釣られる癖にここぞとばかりに抵抗をするとは。

「はあーい。大人しくしてくださいねー? 怯えなくても大丈夫ですよー?。」

「嫌ですよー私の口並みのドリル持つてる相手にどうおびえずにいるというのですか! そんなのムムモゴツ!」

「ていつ。」

進まなそうだったので口に指突っ込んで怯んだ瞬間に頬つぺた引っ張って口を開けさせてみる。

非難がましい目が痛いけど、これも神様のためなんです…。  
涙目幼女にちよつとグツと来てたのは内緒。

「(後で覚えててくださいよ!!)」

こやつ、直接脳内に!?

「(やってる場合じゃないですよおおお!)」

「はぁーい、それでは痛かったら手をあげてくださいーい。」

「ぴゃあああああああ!!!」

「ふう…良い話が聴けましたわ。また是非お会い致しましょう!それでは。」

治療が終わった後、いろいろと生きてたときの話とかしながらコノエ様との雑談をしつつ気絶した神様を正座して膝枕で介抱していたのだが、人間の話が珍しいらしく俺が話す度に一喜一憂してくれたのでつい話はずんでしまい、結構な時間が経っていたらしい。

次の診察があるとのこととコノエ様は帰っていった。

そして、残ったのはブスとした様子で頬を膨らませる神様と膝枕したままの俺。

サラサラの髪の毛を撫でてご機嫌とりしてるだけでも役得だからいんだけどさ。

「そろそろ機嫌なおしてくださいよ。ちゃんと治ったんですから。」

「ふん！知りません！」

状況は変わったけど不機嫌な様子で会話にならないのはまた一周回って戻ってきた感じだなあ。

ソフトクリームはちゃんと用意するとして、暫くは言うこと聞いてあげましょうかね。

「ちゃんと歯磨きすれば虫歯にもなりませんから。神様達の場合特にな。

なまじ、コノエ様達とは違い、ここで人の相手をする人が多い分、見ている世界の営みをイメージしやすいのだろう。想像力豊かな程引っ張られやすいって感じかね。

すると、寝返りを打って俺の方に向く神様。

「……随分と楽しそうに話してたみたいですね。私は夢の中でさえも大変な目にあっていたというのに。」

「俺の……いえ、人間の話をしていただけですよ。……神様にも俺の……と話します?..」

「貴方のお話なら知っています。一生涯分観ましたから。」



「はい。知っています。神様は俺のことだいたい全部知ってらっしゃいますもんね。プライベートも息してませんよホント。全部しられてるのなら、相思相愛どころか切っても切れない以心伝心の仲ですよ。」

「何を言ってるんですか。貴方からの一方通行ですよ。それに、貴方は私のことを知らないでしょう?」

「神様が凄い方なのと、とても魅力的なことは知ってますよ。他の神様達から有名なです。」

「今更褒めたってそう簡単に機嫌を取れると思っても無駄ですよ…。」

「ありや、残念。神様の方がうわてですねえ、やはり。」

「当たり前ですよ…。私だって…。いつもいつも貴方にチョロいなんのと…言われたままではないのです。」

「流石ですね、神様。ご立派です。そして、そんなカッコイイところもまた一つ知ることができました。ですから、これからもっと知ってい

きたいと思いますよ。神様のことを。」

「ふんっ…生意気………ですよ…人間のくせ………に。」

「人間ですから。魂だけですけどね。だから惚れっぽいアホなんですよ。神様マジ可愛いです。結婚してください。」

「………1000…年………早い…です………ZZZ」

「はっはっは。また振られちゃいましたか。でも諦めませんよ。100年経っても冷めませんよ。おやすなさい神様。」

## 飛ばされたから戻ってみた 前

突然なんだが、明晰夢って知っているだろうか？

夢の中でこれは夢だと自覚するっていうアレだ。夢は記憶の整理つてのがほんとならしいけど、妄想が夢に出てくる時もあるよな。だからその辺は割と曖昧なのかもしれないけど。

それでなんだが、ホラーとかで、朝起きる夢を見るっていうシーンがあるだろ？起きてみたら目の前にオバケが出てきて叫んだら眼が覚めるっていうパターンのやつ。

アレ実際経験してみたことあるやつは分かるだろうけどやけにリアルなんだよな。

自分の部屋が背景なこともあるし。うわあーとか、内心思つても、そこでまたかよなんて言えるほど慣れちゃいないだろ？

だって、脳味噌働いてねーんだもん。無理もないよね。そんな経験普通はなかなかできませんよーてなわけで。

うん？ 結局何が言いたいかって言うのだな。

寝ている間ってすごく無防備だねってことだ。

どうやら、別の場所に飛ばされてしまったっぽい。それも寝ている間にである。

というのも、本来眠る必要も無い魂だけの状態の俺や存在が違う口り神様なのだが、人の営みによりすぎというかかぶれ過ぎというか。

いや、俺は元人間（現在死人？）だから生前の行動に従つてもおかしくないことなんだろうけどさ。（要は気分次第なのだが）うっかりと眠ってしまった訳だ。

それで、気が付いたら見たことない世界の上空に浮いているっとうね。

うん、マジどうしよう（困惑）

何気に俺って、脈絡無しに神様のところから飛ばされたのは初めてなんだが……。チキショー、幼女からかって無いのにとばしやがって。

ん？ あ、把握したわ。だってポケットに紙入ってたし。ご丁寧にスッゲー達筆で、

《たかが人間如きが神聖なる領域にいつまで残っておるつもりなのか。神に対し不敬であるぞ。よって悲嘆なき世界にて勤めを果たせ》  
って書いてあった。

悲嘆なき世界ってなんぞ？ ギャグ時空とかなの？ そして勤めとはなんぞや？ 例の奴っこさんでも倒せと？

無☆理☆デス。

ふざけるよオマイら。奴さん倒したらここに追放したまんまサヨナラバイバイのパターンだろ知ってんだよアホめ。

ウチのロリ神様というヒロインがいもしないのに別世界なんぞに留まってたまるか。

これ、アレだよ。前に見た邪神の方々ですね。位の高いロリ神様を上に見てる節があって神様なのに神を敬つてるとも言えれば良いのかな。

こんなこと言ったら不敬ってやつなんだけどき。

嫉妬乙www中坊かおまいらwww

要はそんなとこっしょ。相思相愛（願望）な俺と神様に対してちよつかいかけてきましたーって。

いや、俺があそこに残ってんのもわがままなんだけどもね。大方、アイドルにひつつく悪い虫が気に入らないのかね。

うぐっ…自分で悲しくなってきたぞ。でも泣かない！私がんばる！

冗談はおいといて、落ちきってないってことはやっぱし他の神様の加護とかが効いてる感じかな。

なんとなーくだけで、無理やり実体持たせようとしたけど弾かれたみたいなのがする。

知り合いの神様方の隙についての犯行だろうに。弱いなあ…邪神の方々。

あ、邪神とか言ってるけど、マジモンの邪神様とかではない。基本ここ、てかあのロリ神様や他の神様達がいるところには善よりな方々しかこられんよ。

ちよつと力が弱くて意思も弱い感じの神様達はいろいろとやらかすので、その後始末をしてらっしやるのがロリ神様含む偉い方々。

その偉い神様達から邪へよこしま〜と呼ばれたくなければ、がんばって権能磨けよー、修行しろよー、って事でそう呼ばれてる。

ロリ神様がその話をしてくれてた時に人間みたいですわねって言ったたら、似たようなものですよ〜って言ってたわ。

人間含む生物に近い形の普段の状態とは違う、ゴツドモード(笑)は肩こりや疲れの溜まるものらしいからね。

普段はあんまりやらんのだろうな。だからこそ人に近い発想で行動したりもするのかね。いや、むしろ、人が後な気もするけど。

よし、原因は大体予想だけど把握できた。

そんで、ふわふわ自由に動けるし、一時的に弾き出されて此の世界に来てるけど扉開けばまた戻れるのみたいだし。リアルVRゲーだでも自己暗示かけてやり過ぎそう。

ーゆっくりしてたら軽く世界終わっちゃうから急いでどうにかしなきゃならんし。

根拠？んなもんないよ、勘だわ。でも、勘だけ俺の執念、邪念、その他愛情をなめてもらっては困る。速攻帰って神様を撫で回すんじゃない。

……………、……………、……………!!!

あ、そだわ。奴さんに会ってそれっぽいセリフ言っとけば暴れてくれんじゃね？そしたら波動かなんかが起きて神様とな爺神様あたりが気づいてくれると思われ。

つわけで、あんにゃローを探しますかね。

「おのれ妖ものめえ！妾が成敗してくれる！……だから、離してええ！」

（妖じゃないよ。ただの半透明なお兄さんだよ。）

はい、というわけで見つけました。早かったねえ……。ふわふわとここまで自由に飛び回れるのなんて初めてだから調子乗ってとぼしちやったからね。しゃーなしだね。

「見えちゃう！妾の……じゃから一回降ろして！お願い、お願いするから！」

大丈夫、大丈夫、少しひやつとするだけよ。そこに気づけば後はもう慣れだから。

「ぎにやあああああ!？」

てか、怨敵まさかのロリっ子だとは思わなかったよ。神様に続いてまた幼女とはねえ……。wkwkしちまうぜ。

え？違うの？あ、そう。

変な電波が教えてくれたよ。俺の怨敵さんじゃねえらしいこの幼女。

つーことは、邪神の人ら間違えて別世界送りやがったなさては。

ロリ神様が反応してくんねー訳だよ。

……さ、流石に厄介払いが出来たからそのままにしとくとかじゃないよな……？

だとしてもせめてこの半透明な感じやめて欲しいんですけど。めっちゃ中途半端やん。

「おねがいじまうう…離してください…ひつく」

やっべ。ロリっ子泣き出しちゃった。いつもの神様とのノリで伝わってんだとばかり。

MONONOKIとかフレンズじゃない方の獣が出そうな森の中で幼女掴んで泣かせてしまった半透明の俺。

事案だな。

「悪かった。ほんとすまん。降ろすから泣き止んでくれ。……ほら、落ち着いたらでいいから話を聞かせてくれ。」

頭ぼんぼんして目線合わせて微笑む。園児達に泣かれた時はこうしてたんだよね。ロリ神様にもしてたのは内緒。

「…ぐす。妾は偉いんじやぞ…ばーか。」

「ありがとうございますー！」



「なんで礼をするんじや。おかしな奴め。」

いや、ご褒美だったから。つい。

「本来ならば打ち首にしてやるところじやぞ…。無礼千万の極みじや。」

……特別に許してやらんでもないから…その、妾が…泣いたことは言わんでくれ。」

あら、可愛い。俯き照れ頂きましたーと。

「もちろんだよ。俺が悪いんだしね。それで、いきなりなんだけど、しだけ話を聞いてもらえないかな？移動しながらでもいいから。」

見つけた時は何処かに向かう途中つぼかったので、なんとなーくもともと向かっていたであろう方向を指差しながら言う。

「……そうじやな。立ち止まっている場合ではなかったわ。妾は進まねばならん。歩みは止めんが、話だけなら聞いてやろう。」

ーそれもまた上に立つものの義務よ。

いちいち発言の端に色々背負ってるのが垣間見えるなこの子。とか、思いながら本題入らせてもらおうかな。

「全然信用できないと思うんだけどさ、俺も今困ってるところだから、助けてくれないかな？そこなとつても素敵なお嬢様〈レディー〉。」

「…キモいんじやが。」

さて、そんなこんなで相方に凄まじく胡散臭いものを見る目で見られながら、俺の幼女に再会するための冒険が始まったのであった。

新たな幼女と共に。

## お茶の間神の間

くく神様ルーム

爺と幼女のお茶の間より

神達が住まうかの場所から変な魂が連れ去られた少し後の頃。その気になれば時間すら超えたりする我らが幼女神のおわすここでは、ロリっ子の気分次第で変わる空模様は現在冬の晴れた空を写していた。

「ふう。最近はや冷えますねえ、温かいお茶が美味しいです。」

「そうだのう。こどもも季節感とやらを持たせると風情とやらが儂にも分かる気がするわい。」

「はい！私も良いものだと思います。色々な世界を観てますけれど、なかなか味わってみようとは思いませんでしたからねえ。」

創り出したり譲渡したりと割と安易に扱われている一つ一つの世界を見て、何処かのロリコンが微妙な顔をしていたりした訳ではあるが、神達にとっては寧ろ日常のようなものである。

手元にあれば、管理はするし対処もする。全面的に救うこともあれば、滅ぶのを静かに見守る時もある。

神達から言えば、世界とはそんなものである。

どんな風に創り出しているのか、何のために世界を構築しているのか、その部分は暇つぶしのために人に近い状態にいる普段からでは読み取ることはいかならう。

―― ある魂は神へ問う。ならば世界とは何なのだ、と。

―― ある神は答える。定めたままに宇宙や天地を詰めたものだと。

ズレていく様を見る神もいれば、決めた設定に基づいて調整する神もいる。あらゆる世界を見て笑う神もいれば、片っ端から壊していく神もいる。

そんなもの達は一部でしかないが、時の流れも有って無いようなものからすれば、それ故に気にすることもないのだ。

「ほっほっほ。知つとるもんでも分からんことがある。神が逆に教えられると思わなんだ。じゃから儂らも飽きてきたなどとまだまだ言っってはおられんのかもしれんな。」

「ええ。私も知りたいことが増えましたからね。」

「あの小僧に感謝せねばな。」

「うふふ。そうですねえ。」

完全に見た目は孫と祖父のそれだが、中身はまず人ではなく神様である。見た目などあてにはならないという言葉が一番会うのは案外この神達には当てはまっていたりするのかもしれない。

だだっ広い空間に冬の季節模様を映し出し、茶の間を再現したコタツに、常に数の減らないみかんと中身の減らない急須で淹れたお茶をすすりながらもお互い、ソレに触れることなく会話は続く。

「そういえば、付き添いの天使さんはどうされたんです?」

「あいつは寿退社したわい。一目惚れからのスピード婚ってやつじゃな。」

「おやおや、そうでしたか。うふふ。天使といえども微笑ましいですな。」

「……そっち方面ではポンコツじゃったからせいぜい長く続くとよい

がな。」

「人を見る目はある子でしたし、大丈夫ですよ。」

「人ではないがな。」

「はっはっはっ」

会話の切れ目になるとお互いにチラツと目配せをする。

「そうじゃ、今度また終わった後の世界群から星を抜き出して打ち上げられるぞ。」

「!またやるのですか。たしかに綺麗ですけどね。」

「はっは。奴らも暇なんじやろ。」

「ええ。褒められた話ではないですけどね。」

「そうじゃな。だが、還元する前に使うのもその神の自由じやろ。」

「はい…ですから私の言えることはありません。でもですね…。」

「ああ……。」

「うるさい（んですよ）わな。」

「私もお祭りは好きですが、あれは頂けませんね。」

「儂も毎度見ようとは思わんわ。」

そして同時に「ふう…。」と一息つくともた話題を変える。そんな流れをずっと繰り返していた。

この神達も付き合いは長いのだが、普段以上に会話が捗らない。お互いに位の高い神故に通常であれば敬遠されがちなのだが、人柄とも呼べる性格が温厚で愉快的な為、人気が高く、自然とこの2人も気が合った。

なんとか場を持たせようと会話の種を探るが、最近の話題といえはぼぼ偏っていたのでなかなか出てこない。

というよりも、お互いにどちらかがソレについて切り出すのを待っている状態だった。

だがいかに人からすれば気の長すぎる神様であつたとしても、いい加減その無駄な存在感のある不気味なオブジェをそばに置いておくのにも耐え難くなつてきたので、お互いに切り出した。

「……………で、どう（します）（するんじや）？」

視線の先には、魂だけの状態から中途半端に抜き去られたせいで薄っすらと輪郭の残る動かない不気味な人型の物体が固まつていた。

きつと、お化け屋敷の蟬人形と間違えられてもおかしくはないだろう。

固まつたタイミングも悪く、白目を向いている為余計に怖い。

見つけた幼女はあまりの衝撃に、いつも以上の力で吹き飛ばそうとしてしまったが、中身がスカスカすぎて衝撃が貫通してしまったために悪戯ではないと判断して今に至る。

偶々遊びに来ていた爺も涙目な幼女に泣きつかれて巻き込まれてしまったのだが、反応を探ろうにも見当たらない。

本気出して探せば直ぐだったりするのだが、それもしようとはしない。

こうしてお互いまつたりしているのはなぜか？

（不気味すぎて関わりたくない…というか偶には静かにしていたい！）

ゆっくりしていた期間が長いものは大抵イベントがあると疲れたりする為、慣れるまで多少かかったりするのである。

そのため、普段から騒ぎすぎたせいである意味自業自得にほつとかれてしまっている可哀想でもないオブリジェはその後しばらく放置されていたという。

飛ばされたから戻ってみた 中

和装の幼女に同行しながら話を聞いているフリをしつつ、脳内フォルダの中に可憐な姿を保存する作業は着々と進み、今では神様と和装幼女の二人が俺をお兄ちゃんと呼びながら取り合っていた。

えへへへ。困っちゃうなあ。お兄ちゃんは一人しかいないんだぞ。だから、順番にね。

「おい、聞いておるのか戯け！」

こくら！戯けじゃなくて、お兄ちゃんだろ？全く、お口が悪い子はぐりぐりしちゃうぞー！

「どこ向いとんじゃボケエ!!」

ごっはああああ!?

妄想がエスカレートしすぎたせいで鳩尾にヤクザキック(下駄装備)をくらってしまった。

あれ？そっちからも触れんの？木とかは偶に貫通する今のマイボデイを？

流石は特異点(仮)、侮れん幼女だ。

「主から助けを乞うておいて話を聞く気もないのならばさっさと去らぬか!!」

「誠に申し訳ございませんでした!!」

はい、完全におれが悪いですね。でも、しょうがない。可愛いんだもの。

神様が近くに居なくて人(?)恋しいのもあるのかもしれないな。やだ、まだ1日も経ってないのにもうホームシックとは。



はやくおうちにかえりたい (迫真)

「はあ…そもそも、何故こんなことも知らんのじゃお主は。」

やれやれ、という風にため息をつく和装少女だが、仕方ないじゃないか。だって、文字通り世界が違うんだもの。

「すいやせんでした姉御。へへえ、アツシ無知なもんで。」  
「ウザいわ!」

ちよつと辛辣すぎない? 取りつく島ないっつーか、ボケても反応薄い。いや、ボケをかましてるわけじゃなくアホなだけどき。

すごくく切羽詰まってるというか焦ってるというか…。若いうちから溜め込みすぎも良くないと思うんだよね俺。

というのも、こんな風に話しながら(一方的)もこの子は足を止めない。最初こそ俺と戯れ(?)ていたけど、離して落ち着いたら思い出したようにシリアスを展開している。

いろいろと聞きながらも、どこへ向かうのか、それとも何かから逃げているのかもさりげなく聞いてみたんだがはぐらかされた。

でもなあ。そんないかにもどうしようもなく、それでも行動しなければいけないから、泣き喚くのを堪えてるような面されてたねえ…。

ロリ神様ならわんわんと泣いて、どっかの妙な冒険に出てきたキャラのみたいに、あえて気分を落ち着かせたりするところだろう。

以前に、というか今もだが、やっぱり幼女は笑顔じゃなけりやな。守りたいこの笑顔!と言ったが、悲しくて泣いている…取り返しがつ

かなかったり大切な場面だったりなシリアスな時以外の、なんていうかな。

許してはおけない涙以外はグツとくるものがある。

？（。D。）ピャー！みたいな感じの泣き顔や感動で流す涙なんかはご馳走様です！って感じなんだ。

あ、分かんない？そうですか…。

「それで、ちゃんと理解したんじやろうな？アホ面浮かべおつて。」

「モチのろんってやつですよ」

「そうか、ならば述べてみよ…いや、やっぱり述べてよいわ。疑問もないなら去れ！」

「聞いてませんでしたごめんなさい。そして距離取らないでもっと会話したいし人恋しいんです幼女成分が足りないんです。」

さつきから出てきては唸り声をあげて俺に突進しかけてはすり抜けたり、幼女を見ては怯えて逃げていつてる獣やら変な生き物図鑑にでも載ってそうな奴らじゃ話できなさそうだしね。

「……はあ。めんどくさい奴じゃ。」

正面から溜息をつかれたでござる。ごめんね。

「というか、お主がどういう状態だか知らんが飛べるのなら見てきたら分かるじやろが？」

「別れたくないんだよ。君といると幼女欠乏症が緩和されるからね。」

「変態が。」

「ありがとうございます。」

と、こんな会話と質問を2〜3周しつつ律儀に応えてくれるこの子はやっぱり良い子だね。

守りたいこの笑顔ってーのを見たくなるね。(キリッ

はいはい、いちいち引かないで慣れようかそこ。

とりあえず聞いたこととか上から落っこちてきたときにチラりと見たときの映像を必死にサルベージさせて分かったことをまとめようか。

まず、この世界、島みたいな感じの世界で、端っこまで行くと終わりっぽいね。

べつに端の方から水が落ちたりはしてないみたいだけど、端の方が盛り上がっていて、そこまで行く手段が無い。というか見た目よりも広いからたどり着けそうに無い。

深い皿に乗ったオムライスみたいなもんかなあと俺は思ったよ。

生き物は大体が真ん中に集まってるらしい。それで、オムライスを縦横にぶった切って4等分した感じに国のような領土があるらしい。

国といっても、弱肉強食の世界らしく立派な国家があるわけでは無い。そして、人っぽい生き物がそれぞれの領地に居て、お互いに競り合っているという。

どこの世界もかわんねえなあとか思ったのは内緒だ。

むしろここ作った神様のな方々が似てる？ いや、不味い話はいいや。

ここは色々と食糧も豊富だが、自然に生きてる動物モドキ達もその分強いので、正直戦争事なんぞやってる暇あるのか？とも思った。

だってちらほらと見えてる獣共かなり見た目やべえよ？ 実体あつたら半日持たずにお亡くなりだったと思うね。

そんで、しょうもないことに、そういう風に造られた訳ではなく、我こそが人なりくみてえな？ 人とは言ってないけど。

2 足歩行で喋れるなら大差ないと思うんだけどなあ。

要は、他の領土からなんか出てきたよ、とりあえず攻撃ダーつてな。

話し合い？ 無理だろうね。出来るとしたら、いつペンみんなで紐なしバンジーしたら魂がフワーつとするじゃろ？

そこに自我が残ってれば冷静に考えられるんじゃない？ (適当) 神様も言ってたよ。こういう世界はそういうものなんだつてさ。

取ってつけたように言うなら、今ココを持つてる神の性格が出てるんじゃないかねーかな。

そして、この少女は、北の方に居たらしいんだけど、産まれた時から自覚できる程ウルトラなソウルだったので、いつの間にやら祀りあげられ、一緒に住んでた奴らを守ってきたらしい。

そうそう、何よりも大切なポイントとして、この世界では、生き物は大概全部ポップする。RPGの敵みたいに。

ポンつと現れて、突然に変異した個体が現れて、その個体が生まれた時点から普通に現れるようになって、争う中で負けた方はまた変

異して…………。

だから、俺が現れた時もその状態だったっぽいね。扉をくぐった訳じゃなく、放り込まれて無理やりねじ込まれたから不具合が出たみたいね。

それはそれとして、強い奴がいれば、バラバラに住んでいた同士がだんだんと集まって、ひとかたまりになり始める訳で。

残りの領土でも同じようにそこそこ脳筋な奴らが領主的な立ち位置になり、自然とお互いに総力戦的に張り合っている、と。

けれど、俺の宿敵さん（もはや出番ねえんじやねえの？）には劣るけども世界に波を起こすくらい力を持つてしまっている幼女がこの世界では強いであろう他の3人と同レベルな筈もなく、靈感なんかはなくとも本能的に敵を絞り、北対他の構図になったらしい。

そして、自国の3倍が攻めてきて約2ヶ月は問題なく、4足の獣を飼ったり、隠密に長けた奴やら念力（神基準ではシヨボイ）使いやらが始めてから約半年、この幼女はほぼ一人で無双ゲームをしていたという。

「つつよーい（棒）ー」と言っただけで頭を撫でたら凄くキレられた。

だが、脳筋だった奴らもだんだんと正面きつての殴り合いから、周りを倒す方向にソフトチェンジして、この子を孤立させるつもりだったのか、見せしめのように目の前で……………。

ということもなく、やっぱり相手にならなかつたらしい。

数の利？この幼女高速移動すんだぜ？

加速加速。速さが足りないんだよ。前に生きてる時間が違うとかなんとか言った気もするけど、うちのロリ神様とのやりとりは、俺の生前基準で考えると多分知覚できないんじゃないかなーと思う。ほら、よく言うだろ。時間を超えたいならまず光を超えよ！つて。

だが、張り合いの無い争いを見るのに飽きたのか、突然のように飼っていた獣達が凶暴化し、住処を荒らされてしまった者達で溢れ返りだしたという。

とても手に負える変異ではなく、ぶつちやけ手を加えたんだろうな。

戦争どころではなくってきた中、ついに北にも野生化した獣が他から流れ出る水のように広がり始め、幼女を避けつつ北の住人達を襲い始め、始め……そして、滅んだ。

対抗も続かず、アツサリと。

相手をしようにも、人型でもなく、スタミナ無限に死ぬまで暴れて増えていく獣相手に、こちらはスタミナ有限、いくら強くとも、それとはまた別の話になってしまう。

そして、それだけで、ただ終わった。

続きは無い。ほんとにあっけなくこの世界の人型のお話は終わったのだ。

ただ、一つだけ付け加えるなら、

死に際に、『どうか、生きてください。一人でもいればそれで良いのだ。』

なんて、酷いことを言われて、涙ながらに逃走してきた幼女が残っていたぐらい。

この世界で生きていた奴の世界なのだから、俺にこの住人の願いを怒ったりなんてする資格はないけれど。

ただただ、呆然と歩いて、仇の獣に倒されることもなく、相手もおらず、焦ったように歩き続けるだけの強いこの子に、泣いていて欲しく無いとそう思えただけのことだ。

「相手はおらんが、それでも止まっておるわけにはいかんのだ。主の知りたいことは答えられなくてすまんかったな。

……ああ、そうじゃ。妾の事を話さんでからと言ったが、今は話す相手もおらんのじゃったな……。」

そう言つて、たはは と、笑う和装の幼女。

ちよつと待つてもらえる？ 今日からスプラッシュユマウンテンが溢れて止まらないから。

「なんじゃその顔は。そのうちまた誰かしらには会えるじゃろ。なんせ、妾が生きたるんじやから。寂しくなんぞないから、放つておいてくれ。」

だから、ちよつと待つてつて。たたみかけないでくれるかな！ 流量が倍々で増えちゃうから。

「……………主の役に立たん妾についてくる必要はないじゃろ。外か

ら来たというのなら、外に向かって飛び続ければあるいは戻れるかもしれないぞ?」

もう、あのですね。遠ざけようとされんのは慣れてるからいいけど、その、アカンですよん。それは。

「久しぶりに話が出来て楽しかったわ。礼を言うぞ。主の目的も叶う事を祈っておるよ。大変だとは思うが、頑張るがよい。妾は少し寝坊助な同族を待っただけじゃからな。待つだけならば、気を長くして……居れば……よい。」

……………。久しぶりって……普通は直ぐ現れ……………。

「ふふっ。変態の主には辛かろうが可愛い妾のことはせいぜい早く忘れた方がよいじゃろうな。」

……………。

「情が移る前に去る方がよい。じゃから、ここで、さらばじゃ……………」

……………。( ; ω ; ) ブワア。

「もう無理イイイイイイイ!!うわああああああん」

と、言う訳で、俺の涙腺が崩壊した後さらにダムが決壊したので、どうしようもなく乾いた笑い方をする和装幼女を感情のままに思いつき抱きしめて頭を撫で回す。



「な、何するんじや!?? 離さんか! 変態めが!」

「頑張ったなあああチクシヨウ!!! よーしよし! 辛かったなあ! 寂しかったよなあー! よく耐えたなあ! 偉い! 強いなあ!」

「…うるさいわ! 離せ!」

「もう大丈夫だから! 寂しそうにしないでなくても大丈夫だ! 泣いたって良いんだぞ? でなきや…: 俺が泣く! びやあああああ!」

「いや、なんでじゃ!? というか、痛い痛い痛い!」

「うおおおおおおおん!! おーいおいおい」

「それ本当に泣いておるのか!?? というか痛いと言ってるじやろうがー! 顎でグリグリするな! やめつ、ちよつ、冷たいぞ☒垂れとるわ!! お願い離してえええええ!」

その後しばらくお互い（一方的に）泣き続けていた。  
分かるさ。涙が枯れても心が泣いているのが。

だから決めたぞ。必ず、一言この神に文句言つてこの子連れて帰る。

決定事項だ。世界で唯一、一人だろうがんなこときにするものか。

満足するまで、愛で回して笑わせて、嬉し涙で泣かせてやるぞ。

だからまずは結局この子に協力してもらおうことにはなるけれど、

こっから帰ろうか。

幼女を泣かせるアホ、絶対に許すまじ。

飛ばされたから戻ってみた 後

幼女、トランスフォーム!!!

つてのは冗談としても、コッチは冗談じゃないぞ？

テレテツテツテツテ！テレテツテツテツテ！テレテツ  
テツテツテツテ（略）

本日も始まりました、3分クッキングのお時間です。進行は、紳士ことこのワタクシと、和装幼女先生でお送り致します。

「…なんか始まったぞ。なんなのだこれは？」

口調がくずれるほど先生も張り切ってらっしゃるご様子ですね。それでは、早速本日のレシピをご紹介しましょう。

「あ、スルーの方向で行くのか主。」

今回作るのはこちら！つ《くっころ野郎の包み焼き》とタイキックとデミグラスソース風味》です。

メモの用意はいいですか？材料はと準備はなんとこれだけ！

くっころ野郎（神）……………1神

タイキック役黒子（俺）……………1人

なんともまあ財布に優しいメニューでしょうか。料理下手な幼女神様にも簡単に作れちゃいますね。



~~~~~

いきなりのスプラッタ（笑）ですまなかつた。反省も後悔もしてないけどな！

さて、話は体感時間で数時間前に遡るんだが（実際世界飛び越えたら時間とか関係ないしな）、何も難しいことは無い。

幼女を泣かせるクソ野郎に会うために和装幼女に協力してもらって世界の壁を越えてゆけえええ!!を実行しただけだ。

え？分かんないって？

考えるな、感じるんだ。

……いや、すまん。言ってみただけだ。

えーとだな、前にちよこつと、説明したような気もするけど、俺のことをヌツコロコロしてくださった怨敵さんのごとく、この和装幼女もちよいと、生まれた時に魂についてきてしまったパワーが、多すぎなんだよね。

世界って言葉を単位として便宜上使用けども、ロリ神様の管理する世界群の中でなら、循環された魂に、本来少しずつ再分配されて残らない筈の無駄な力が備わって突然変異っぽく生まれてくるのが、和装幼女の様な魂の持ち主だ。

それが何処からかのちよつかいなのか小さなきっかけが積み重なった結果なのかはロリ神様（通常バージョン）にも分からないらしいけど、俺の怨敵さんの様に、その世界に居ながら周りの世界に波を起こしたり、意図的にぶつ壊したりと、割とシヤレにならん奴も時々ま出てくる。

ここで言う世界って単位は、パラレルとか並行世界とかそういうものも含めて言うものだ。俺がもともと居た世界を基準とするならば、俺の元いた世界のパラレルとか時間軸の違う世界とかも含めて、1つ

の世界。

分かりづらいただろうから、1タイトル作品だとも思っておいてくれ。原作が1世界として、他メディアやら二次創作やらその内容やらもそこに含まれるって感じかな。

……余計分かりづらくなつたのは気のせいだと思いたい。

話を戻すが、俺はロリ神様のところでバスガイドさんのことをやっていたので、そもそも俺自身が魂だけなんだが、よその魂に少しだけ触れられるんだ。ロリ神様に触れたい一心で頑張った修行の成果だな！

だから、和装幼女に話を聞いてもらって、すっごく大きいです…な感じの幼女パワーのうちのスピーカー機能を使ってもらったんだ。

和装幼女自身が、この世界を取り持っているクソ野郎に散々弄ばれて、たつぷりと縁は持っていたのだから、その方向に照準を合わせ、後は中途半端に引つ張られてきていた俺の魂をゴム紐を戻す様にして、和装幼女に吹き飛ばしてもらうだけで、案の定、高笑いして見くきっていたクソ野郎に御対面♡ってなわけだ。

和装幼女自身は、俺が引つ張られる時に勢いで捕まえてきただけなので(完全とばっちり)、挨拶もそこそこに、くっころ神を荒縄でふんじばり始めた俺を止めようとしてたんだ。

「なんじゃここの!?」とか、「いきなり何しとるんじゃ主は!?!」とか、「いかにも神っぽい相手に容赦ないなお主!?!」とか、テンパってて可愛かった。

が、そもそもここを作ったのは、こんな…と言ってはなんだが、低級な精神構造した下級神ではない。神様の間でやり取りしてた世界からこっさりすっぱぬいて好き勝手してただけだ。全く…面倒臭がって(邪神)郵送なんか頼むからゴタゴタに合わせて盗まれるんだよ。偉い神様エ…

よりにもよって、力、性格、容姿、その他揃ってひどい奴に当たっ

たな…この世界も。

こんなんだから、邪神（例によって俗称）なんぞと呼ばれてるんだ。

「いや、容姿がひどいのはヌシがボコボコにしたからじゃろ…」

なんのことやらさっぱりだな。

けれど、コレに関しては遠慮なぞない。和装少女の信じていた神なんかでは無い上に、これのせいで少女が涙を堪えて耐えて、堪えきれずに泣いていたのだ。

この世界で生まれた宗教に口を出すつもりは無いけれど、信じていたのが勝手なもんだとしても、管理する側が好き勝手しても文句は言えない立場なのだとしても、今回は、偶然見てしまったし、知ってしまった。

ならば、悪いのは、こいつと、汚い魂Ⅱ俺（自覚あるんだ…とか言わないのそこ！）に出逢ってしまったこいつ自身の運命とやらじゃないですかね。

そんなんでも、腐っても神だから、なんでもまかり通ると思ってるこの神…ふむ、許すわけなかる？

立場的に考える？いや、死んでんだから人権も制約もくそも何もねえよ？唯の魂ですからね？

いや、んなことはどうでもいい。

可愛い正義だ。

と、まあ、そんなこんなで有る事無い事織り込んで、この神がやってきたであろうことを説明したら思うところがあつたのか止めることはなくなってくれた。

有る事無い事言つたのだが、喚いていたことを聞く限りでは反省

も無くロリ神様の様に先ずは聞く耳も持たず、俺の様に狭いみみつちい心で、とかむしろ下級であることの八つ当たりを盗んだ世界にするという始末。

指摘したら黙っていたあたり、ほとんどがあたりだったと確信したので同情の余地はない。

さすがにちくわプレイとカマンベールチーズプレイは無かったみたいだけどな。

……………なんか違う?…いや、違くないだろ?…???

……………変態でもあったんだよこいつは。多分。

「何を勝手なことを言って「うるせえ。」ガバアツ!」

まあいいや。

テレレテツテレ〜!

じじい神様特性の…どんな神でも抑えられる荒縄〜(ダミ声)で、逆さ吊りしてボコってピクピクしてるこやつをどうするかな。

…え?和装幼女がカツコイイ啖呵を切ったシーン?

それは、俺がロリ神様への浮気(身勝手)になりそうな予感があるので描写しないぞ。

いや、俺の心がロリ神様で埋め尽くされて居なかったら惚れてたね。

仮にも最後の抵抗を見せて威圧を放った神に対して、加護も無しに生身で立ち向かえるとは…………。

これだから、幼女は最高だぜ…。


~~~~~

とりあえず一通り好きにサンドバックをしてもらってから、幼女が飽きる前に帰る準備をしようと思いい立ち、行動開始するかな。

「おーい、起きろー。起きねばもうワンセットお見舞いするぞー。」

バシバシとビンタしていると既に原形をとどめていないツラのくっころ神が目覚める。

「……………うぐ…あ……………絶対に……………ゆるさ……………」

「あ、すまん。手が滑った。」

「うわっちあああああああああ!?!」

なんかまだ喚いていたのでつい手が滑って熱々おでんを鼻に零してしまった。

手が滑ったんだから仕方ないよね（ゲス顔

「ほーれほれほれ、からしのチューブだぞ。今からこれを鼻にねじ込むから、耐えられなくなる前に俺とこの子をウチのロリ神様の所に戻せー。」

「やめ、やめろお前まじでやめろえ、ちよ、ぎゅおええあああああああああー！」

「三分とつくに過ぎてるけど、先生もご一緒に！さあ、このデスソースを口に入れてください！俺は山葵をすりおろしますの。」

「……そうじゃな。色々ついていけぬが、ヌシがやってるのを見とつたら、何故か、こう、胸が、暑くなつてくるんじや。楽しそうと言えばいいのかの……。妾もやってよいのかの？」

攻め方を変えて、ロリ神様のところで貰った持ち運びの謎空間倉庫から、熱々おでん（冷めない）やら対神性のワツサービーやカラーシを使ってみると、和装幼女様の妙な扉を開いてしまったらしい。目がキラキラしてらっしゃる。

「おっとお!?なんか目覚めさせてしまったぞお?うーん……まあ、良いんじゃないかな! Y O U ! やつちやいな Y O !」

後に、こう答えたことを俺は後悔することになることをまだ知らない……。

流石にそこまで露骨なフラグは立てませんよ? いや、ちげーから、お約束じゃないよ! 聞いている? ねえ! ちよっ

今思ったんだけど、和装幼女の世界内部では繋がらなかった謎空間倉庫の入り口が、ここでならギリ外部だから繋がってるってことは、この神これ以上ボコらなくても帰れるんじゃないかね？

「まだじやろ？まだまだ入るじやろ？遠慮するでない。優しい妾が食べさせてやろう。」

「…………ア…………フ…………テ…………」

「嬉しくて気絶してしもうたか。ならば、起きるまではこのでんきいす？とやらで休ませてやろうかの。」

…………まあ、楽しそうだからいつか。もうちよいだけいよう。

~~~~~

あれから、暫く好き放題していた和装幼女様はツヤツヤして満足してくださったようなので、簡単に事情説明しつつ、恐らくこの世

界は還されること、ロリ神様のこと、そして、無理矢理にでも俺と同じく、もちろん本人の気にいる選択が一番だが、好きな神の元に置いてもらうようにという意味を伝えた。

この和装幼女は、正確にはまだ死んではないし、神様達の規定に則ってはいないが、それでも確実に下級の神が起こした問題なので、大丈夫なはずだ。

というか、力が強いので管理世界に赴く派遣社員とされる場合の確率が高すぎる。

ロリ神様も爺神様も大喜びだろう。

……え、やだ、私の立場無い??

すると、考え込むようにしていたので、仲間のもとに帰りたいたいと言われたら恨まれること確定でもロリ神様の所に連れてこうと思いつつ、答えを待っている、かなり不安そうにしていたらしい、俺の顔を見て格好良く答えてくれた。

「たわけめ、心配せんでも妾はそう折れたりはせんよ。ヌシは変態じゃが、ヌシの信じた者達、神達は信用できるみたいじゃからな。」

感極まって、また持ち上げてぐりぐりしてキレられたの言うまでもない。

事情説明したら、連行されるのは確実な元くところ神であったであろう物体は、死なんから放つて置いて、普通に倉庫の入り口から、2人で帰ってみると、着いた瞬間にもものすごく、もう半分引張られる感覚がして、気付いたらちやぶ台にロリ神様を押し倒していた。

おっと? 事案だぞ?

チラツと見ると、固まつてるロリ神様と、察して笑いながら距離を取る爺神、そしてそこに挨拶に行つた和装幼女。

久しぶりのロリ神様の感触に暴走寸前になりつつ高い高いを敢行しながら、振りかぶられた右脚と下着の色を確認しつつ、孫と爺さんみたいに意気投合した和装幼女が、仲間の魂の行方を聞いてほんにやりと笑っていたのが、印象的だった。

騒ぎすぎて怒られた

和装ロリっ子も爺神と上手く打ち解け、ほぼ毎日のように、俺と、仲良くなったロリ神様に会いに来るようになった今日この頃。

爺神とロリ神様に色々と報告を済ませようとする間にも、興味津々な様子で和ロりに連れ回されること数知れず。

ある意味、自分で望んだ結果であるとは言え責任を取らされているようにも思えたりなんかして、反省していたのだが、元気そうな姿を見ると、後悔はないと思えた。

そして今は、生きてた頃で感覚で言えば冬の空模様。時期で言えばサンタが仕事するあたりであるが、一言で言えば俺は浮かれていた。

いや、だってさ。二人の会えない時間がですね、その、長かった(体感)訳ですしね。神様もね?多少はね?寂しがってくれてたりしていたのではないでしょうかね。

いやはや、参ったなこりや。両思いですねえ(ドヤ顔)

それに?神様の悩み事一つだけど解決してきたようなもんだからね?結果的には言えですね、好感度がもう少し上がっててもおかしくないのではないでしょうかね。

つーわけで聞いて見た。

「神様!会えなくて寂しかった分たくさんお話しましょうね!」

「いえ、別に。静かでもとても快適でしたよ。」

神は死んだ!!!いや、目の前のこの方も神様だけれども。

いやいや、待て、餅つけ。あ、ヨイシヨ!

じゃなくて、落ち着け。そんな馬鹿な事は無い。これはいつもの照れ隠しだ。神様がツンデレなのはいつものことじゃ無いか。そうだ、そうに決まってる。きつと、お仕事疲れてるので虫の居所が悪いだけだ。

「神様！何でもお手伝いしますよ！俺が居ない間抜けた分の仕事も大変だったでしょう。また、バリバリ役に立ちますからね！」

「……もう一人の子をつれてきてくださったことには感謝してますけどね。正直に言って、貴方が居ない方が効率がですね。おっと、つい……、気にしないでくださいね。」

神様が冷たい……いつの間に氷の権能を習得したんですか。

「私は基本万能ですからね。」

あらゆる叡智を？

「凌駕してますよ。というか、まだ居たんですか？早く転生なさって……はくれないんですかね。はあ……。一人ぐらいなら消しても大丈夫ですよ（ボソツ）」

「神様!?怒ってます?!?!?かなり怒ってますね!何ですか!俺、なんかしてしまいましたか!?!」

と、ここまで来て神様の額に青筋が浮かんでいるのに気付く俺氏。ム力着火インフェルノですねこれは。

「…自覚があるようでしたら、結構なんですけどね。はあ…。」

……………嫉妬？

「死んでくださいますか？あ、いえ、既に生きてませんでしたね。」

物凄く大きな溜め息をつかれたのだが、どうしようか。

え？いや、待てよ？本当にどうしてだ？…アレか！寝顔写真撮って額縁に飾つといたのがバレたか!?いや、それとも、神様に内緒で男神達だけで賭け事してたことか!?それとも…いや、アレは違うだろうし…うーん

「へえ〜そんなことしてたんですか。ふ〜ん。」

ガツデム!!!カマかけましたね!!

「いや、貴方が勝手に自爆しただけでしょう…。それと、写真は没収です。」

ひどい!!もうあの写真に挨拶するのが俺の生き甲斐なのに!生きてないけれども。

「キモいですよ…普通に。というか、本人の前でよく言えますね。」

隠す必要ないですしおすし。

「そうですか。」

と、そこまで会話をして考え込むようにした神様を見て思う。

これ、もしやデレなの☒もしかして、分かりづらいタイプのデレなのか!? 神様にしては珍しい。ドライな返しか照れる感じじゃなくて、寝顔が見たいなら直接言いなさい的な奴なのか!!!?

これは……萌え死にの可能性はあるのでは？

で、神様、どうしたんです？

「いえいえ、どうしたら秘密裏に処理できるかなーと考えていただけですよー。」

いちよう聞きますけど、何をです？

「……無知とKYは罪なのですよ〜？そして、コレは以前にここへ来た人間からの受け売りなのですが、罪には（私からの神）罰を、です。」

どこから出たのか分からないが、謎の倍率のハンマーを振りかぶるロリ。あ、普通にロリって言っちゃった。ロリ神様。

フツ：例え神様であろうとも、この寝顔写真は渡しませんよ。

振りかぶられ、飛んでくる無数のハンマーの軌道から逃げながら考える。

合法ロリにも更年期障害とかってあるのかな。

あ、攻撃が激しくなった。

そんな風に逃亡劇が始まって少し。

うん、しつてた。怒つてたもんね。なわけないよね。煽りすぎて青筋が浮かぶ程度だったのに背後に仁王が浮き上がってきたね。煽つてたわけじゃないのに。

じゃあなんでだ？と思っていると、袖（の辺りイメージ）をくいくいと引かれ、和装ロリっ子が何かを言いたげにしていた。

「おい、主（ヌシ）よ。ストックが無いから話を進めるぞ？」

「唐突なメタ発言はひかえようか。」

今回の出番そんなんでいいの？

「いや、そんなことよりお教えいただきたく存じます…何卒、何卒。」

でないと、額縁抱えて逃走を凶っている現在、つかまったら、仁王が実体化しかかってきた神様にぼっこぼこにされる。

今の神様には会話コマンドが無いだろうし。

「そうか、それは妾としてもありがたいぞ。早く爺のところまで

ミカンとやらを食べたいのだ。」

あ、仲が良くて何よりだよ。それで？

「うむ。簡潔に言つて、又シ、最近浮かれとつて聞いていなかったじやろうが、ウザかった。もう少しおとなしくせい。」

え…まじですか。

「うむ。というか主、顔を見て分かるから良いが、妾は読心出来ないんじゃないから気をつけろよ？」

ああ、そうじゃ。さつき連絡があつて叩きのめされてた男神達に代わつてあどばいすじゃ。

いべんととやらで浮かれるのは分かるがの。主が生きとつた頃の感覚と神との感覚のズレは主の方がよく分かつとるじやろ。

しつこいと本気でキレられるぞ？いや、嫌われるぞ？

ああ、もう、うるうるするでない！キモイわ！

妾からはもう無いが、爺からの言伝じゃ。

素直に奥義を使え、とな。それじゃあ、妾達は帰るので後は頑張るんじゃない。そろそろあの幼女も落ち着いたじやろ。」

一気にまくしたてられて、反論も無いけど、涙溢れる頭で、一つだけ突っ込ませてほしい。

貴方も幼女です。

その後、冷静に考えて、倉庫から喋る鏡を取り出して来て聞いてみると、ここ最近の俺のウザさが映し出されていた。

サンタ服で周りをぐるぐると歌いながら歩き回り、トナカイ役で4つんばいの高速移動をしていたり、チラチラと神様に流し目を送っていたり。

結論。調子乗りすぎてましたまる。

その後めちやくちや土下座した。

寝顔写真は燃やされてしまったけど、血涙を流し続けていたら、添い寝してくれたので満足した。

きちんと反省することとなったのだが、自分で思い返しても相当ウザかったのにも関わらず許してくれた神様がまじ天使すぎて辛かった。

そんなこともあった

やあ、久しぶり。

口調や流れを忘れたポンコツのせいで違和感を感じるかもしれないが、気にしないで貰いたい。

え？ノリで書いてるだけなんだから、今更だろって？ははは。気にしたら負けだ。主に俺が。

さて、気を取り直していこう。

あれから、時の流れの感じさせないこの場所での神様との日々も続き、幾多もの世界を見てきた。

魂でしかない俺は、磨耗していくばかりであったが、多くの世界を廻り、思い出話を作り、その度に神様とくだらない話で盛り上がった。

もう終わってしまう世界を前に、年甲斐もなく泣いてしまったり、お忍びで世界を渡り、姿を変えてイタズラをしたこともある。

相変わらず代わり映えのない俺に対して、神様は時折姿を変えてそのまま何世紀（そんな時間ぐらいだったと思う）も過ごすこともあったが、やっぱりいつもの幼女姿がお気に入りらしく、気づいた頃にはふと戻っていたりした。

：もしかしたら、俺に気を遣ってくれていたのかもしれない。そんなことを思うと、優しい神様に出逢えて、本当に幸せだったと思う。

和服の幼女だったあの子と言えば、俺の仕事のうちのひとつ、彷徨ってその世界から外れてしまった魂を連れ戻すこと、を共に続けるうちに、俺の認識で言えば徳を積んでいったこととなる。

そのせいなのか、元々の世界を超えての影響なのかは分からないが、神格もあがり、多くの神様達にも承認され、新たな神の仲間入り

を果たした。

立派な神様に見えるようにと頑張って背を伸ばしていたのは微笑ましい思い出だ。

ロリ神様の如く、自由に姿を変えるほどの力は無いが、神が世界に降りた時に信仰を受けて姿を変えるように、成長した力のリソースを消費して、少しずつ自己暗示により姿を変えていった甲斐もあり、本人の希望通りの美人さんになった。

爺神、まあ正体を知った今となつては面と向かつてそんなことは言えないが、あの神様は孫のような和服ちゃん（神様方で新しい神名を検討中らしい）の新たな門出と、昔のような悲しい顔をしなくなつたことを嬉しそうに見届け、いずれまた会う約束をして去つて行った。

きつと、仕事溜まっていたんだな。ずっと、うちの近くにいたわけだしね。

そして、彷徨える魂を導き、神様の元へと連れてくるうちに、様々な出会いもあり、自分との折り合いを付けるためにここに残る魂達と、大勢で過ごした時もある。

昔持っていたイメージのように、毎日どんちゃん騒ぎをして、心ゆくまで笑い、大声で泣き、共に叫び、夕陽を映し出すと、肩を組んで走り出した奴らもいた。

皆、心に抱え蟠りと向き合い、自分の仇を討ちに行ったり、満足は出来なかったが、ここで過ごすうちに折り合いを付け、これでいい、と笑みを浮かべて、消えて行った。

記憶は続かなくとも、記録を残した奴もいた。俺に託したアホもいたが、説明を聞く前に満足そうに行きやがったので、そいつにとつてはそれで良かったのかもしれない。

いささか多すぎる気もしたが、そこはそれ。転生なんてなかなか起こるものじゃ無いが、世界はそれこそ無数にあるのだ。人の魂の数なんて目じゃ無いくらいに。

管轄外の所からひよつこり現れた暴れん坊の中には、もしかしたら俺の敵役さんもいたのかもしれないが、初めからそんなものは変わってないので知らない子ですな。

まあ、まだまだ、色々と話し足りないのだが、もうそろそろ限界かなあ。

頭に霞がかかってきた。元々わかっていたことではあるけれど、ただの魂でしかない俺だが、元は一生物でしかなかったのだ。流石に長く過ごし過ぎて、限界らしい。

最近では、色々な神様にも、お別れを言われてきた所だ。磨耗しきったら、他の魂とは違い、次は無い。それでも望んでここにいた。結局、口説き落とさなかった神様方との賭けには負けてしまったが、仕方がないかね。年季が違う。

はあ：こんなことを言っても、もう精神：魂的にクソジジイ過ぎる俺も年齢ネタ通じないんだよなあ：。なんて、思いながら、ゆつくりと目を開ける。

気付けば、倒れていて、神様の膝の上に乗っていた。もう頭ぐらいいしか無いらしいね。

神様は何も言わずに居てくれる。

この間、もう頑張らなくていいですよ、なんて、イワレてしまつたところだね。

ああ、hなスのも、辛くなつてkた。

身勝手に残って、この神様の為になんて言っておきながら、いい加減かもしれないけれど、消える直前まで、可愛い子のそばにいたいとできて、俺も幸せだったらしい。

”お疲れ様でした。”

そんな聞き慣れた声を最後に聞いて、意識も途切れた。

お疲れ様でした。

「っっていう夢を見たんですよねー。」

「夢オチ☒」

いやいや、なんちゅう夢を見てるんですが。てか、神様が夢見たの？というのは置いておいても、あなたが見ると正夢になりかねんからやめてほしいんですけど。

ちなみに今は、元旦とか無いけど、空模様に寒いので現在はコタツにロリ神様と和服幼女と爺い神とで入っている。

爺い神も空気を読んでか、晴れ着を着て美少女モードなので姦しい光景なのだが、その分俺だけパシリ中である。

「私の匙加減一つでできると言えば出来ますけどね〜。」

「というか、お主なんで消えないんじや？磨耗…：しとんのかこやつ。」

「無駄にしぶとい人ですからねえ…。私もなんか不安になってきましたよ。本当に消えない気がして。」

「そうじゃ！消えろ消えろ〜。」

「消・え・ろ！消・え・ろ！」

消えませんが!?てかイジメ!

ちくしょう。コタツで伸びながらなんて奴らだ。…つくしょう。可愛いなあ!!中身違うのもいるけど。

いや、姿自由だから違うのか?

とりあえずカメラ持ってきます!

「ついでにみかんもお願いしますねえ〜。写真代です。」

ハアイ!!

「儂、煎餅で頼むぞ!」

「妾、ちよこれ〜と!」

了解い!!!!

初心に戻って見た

「起きよ！遊びに行くぞ、ヌシ！」

「ごはっ!？」

やあ、恒例にするつもりだった挨拶も忘れかけていた私だよ。

ごほん、失礼。先日、夢の中でやけに軽快に動く、笑い声が甲高い鼠の方とお会いしてから、一人称がお仕事モードからなかなか戻らないんだ。

曰く、君は接客のなんたるかを分かっているいな。相手が誰であろうとも、普段から心掛けていなければ駄目じゃないか。

とのこと。その後たくさんお説教をくらった。

うっせー、鬼畜め。見た目で油断させるタイプの奴は本当は怖いってのはホントだわ。

” ハハツ☆ ”

うん、寒気がするからやめようか。お見苦しいところをお見せして申し訳ございませんでした。マジ勘弁してください。

……………。

……………よし、寒気が遠のいた。

さて、和ロリっ子に馬乗りで暴れられていて嬉しい半分、鳩尾に深刻なダメージが溜まってきているので、話を戻そうか。

基本あんまり眠らないのに意識が飛んでたということとはまた神様にぶつ飛ばされたかな？

それは良いとして、なんでこの子こんなにテンション高いの？
「よくぞ聞いてくれた！それはの！休日ふりーぱすとやらを貰ったのじゃー！」

ナチュラルに心を読まれているのは、そろそろデフォなので気にしない。子供の成長は早いねえ。

爺いの英才教育の賜物なのかな？

とりあえず和装幼女ちゃんに上からどいてもらって、立ち上がると、キラキラとした目で、金色のチケットを見せてくれた。

とても眩しい笑顔で見せてくれるのでほっこりしつつ、頭を撫でて、チケットをゆっくりと見る。

…キラキラと輝くなんの変哲も無いチケットである。

眩しいぐらいに神々しい光を放っているけれどもね。いや、ここでは、神聖的なものは珍しく無いから。

「どうじゃ、どうじゃ？何処のあとらしくしょんでも乗り放題！というシロモノらしいぞー！」

むふー、という顔がとても可愛い。全く、ようじよは最高だぜ☆。

「ほれ、早く行こうではないか！」

そう言っでぐいぐいと袖的なものを引つ張る和装幼女ちゃん。
……うん、これが父性か。なんでもお願い聞いてあげたくなるよね。

というか、自分で思っというてなんだけど袖的なものってなんだよ。いや、魂オンリーな感じを神様の計らいで人型になつてる訳だか

らおかしい表現じゃ無いのかな？その日の気分が変わるこの服的なものはテクスチャーみたいなの？

よう分からんなあ。設定フワッフワかおい。

(メタ過ぎる発言はそこからへんにしておいてくださいね。)

こいつ、直接脳内に!?

(ちくわ大明神)

誰だ今の!?!?

さて、セルフ芝居はそこそこにして、と。歩きながら考えるかな。

……ふむ。和装幼女に花の咲くような笑顔で誘われるのは嬉しくて堪らないのだが、漸く回転し出した頭は、徐々に嫌な想像を始めてきた。

先ずは、何故こんなに嫌な予感しかしないのか。

↓経験則かな。

ほい、じゃ次。休日フリーパス。

↓なんですかそれ。初耳なんだけど。曜日感覚ないよねここ。次。神様の姿がさつきから見えない。

↓そもそも、なんで気絶してたのか分からん。激おこの予感。

そして、次。なんで、目覚めて直ぐに頭が働かなかった？

↓本当に何故だ？いや、普通だろうって思うかもしれないけど俺は死んでるし、肉体じゃ無いんだぜ？なら、気絶とかそもするはずねえだろって？神様に吹っ飛ばされてるのは別だ。

あい、じゃあ、最後。こんな眩しい笑顔を曇らせるといのはあり得ないので拒否権は無いんだろうけど、直接聞こうかな。

↓エーと、そのチケット、誰に貰ったの？

「うん？・ヌシの所の神様にじゃが？」

…これは…、まずいんじゃないっすかね。

そうして、進むこと暫く。

「よし、着いたぞ！さて、ヌシに選んで貰えと言われとるからな！さあ、選ぶがよい！」

いつもの神様の気分で御用達の扉とは別に用意された明らかに不自然に神秘感満載の扉の先に広がる小さな球体群。

黒の中に白色の粒が散りばめられているものが特に多く、次いで、単色のもの、明滅しているもの、視線を向ければ、それがどんなものか理解できてしまうそれら。

此処に来てからずっと見せられ続け、色々な形で魂を見送り続けた際に目にしていたもの。

最近では忘れかけていた、神様との戦い。送り出しという名の、遠回しな厄介払い。

新たな門出の祝福という名の没シユート。

身勝手なものだと罵るが良い。そんなものは今更だろう？
だが、生憎この神様はとても優しく慈悲深い。

神々の嫌がらせではなく、暇つぶしでも無い。

そう、つまり、これは、どちらかが折れるまで続く意地の張り合
い。

転生、それは、神様のくれた慈悲（俺にとっての危機）

そう、いつの間にやら忘れ去られた宿敵さんなどとうに滅びた後
の祭。

いつの間にやら神様方の話題にすら上がらなくなり、むしろ居る
のが当たり前になりつつあろうとも、それは本来おかしいこと。

誰が忘れようとも、俺と神様だけはそれを忘れまいとも。

俺と神様達の〇〇年戦争である。

いや、すまん。語呂が良いから映画化された書籍ののタイトルパ

クったよ。正確にはポンコツとロリの転生合戦だよ。

不毛な争い（毎回こんなことをしています）

いつだったか、ある時、ふと気になって神様に聞いてみたことがある。

「未練を残してここに留まっていた魂って他にも結構居たりしたんですか？」

「居ましたよ。貴方に比べれば皆短い間ではありましたがね。」
と、神様は少しだけ思い出すように考えて、何でも無いように答えてくれたのだが、俺からすればそれは初めて見る顔だった。

憂いを帯びた表情というか、絵になるような、儂げなものを感じさせる、そんな雰囲気のある表情。人生経験の少ない自分ではきつと理解できないし、慮ることも出来ないであろうものを感じて、気圧される。

まあ？でも、気にしてませんけどね。何故か昔の男みたいな感じ醸し出てるけども？神様そういうの無いって知ってるし？私だつてそこまでガキじゃないです？？気にしてませんことよ？ホントですわよ？

と、適当に自分に言い訳をしていたのだが、もちろんそれは神様にきっちり聞かれてしまっているの、駄々っ子を見るような、母性を通り越して菩薩のような暖かい視線を送られた。

凄くむず痒いので、話を進めたかったが、こんな時は茶化しても墓穴を余計に深く掘るだけなので頑張つて耐えた。

文字通りの神様目線ってああいうものなんだろうね。意味合い変わってくるだろうけれど。

下手をすると、俺が生前にすれ違ったことのある人の数よりも多くの人がここに来ていてもおかしくないと考えると凄いやね。

この神様がいくつの世界を持ってたり作ったりしたのかは把握しきれないけれども、やつぱりスケールが違うんだなあと思い、らしくもなく凹んでいたが、その時神様は確かにこう言っていた。

「本当にらしくないですねえ。いつもならそんなことより遊びましようとか言い出しているところでしょう。はあ……、まったく。貴方の考えている通り私はここで多くの方々を見送ってきましたが、貴方ほど長く残っている魂は居ませんでしたよ。長い付き合いと云ったところですかねえ。」

だから、いつまでも凹んでいないでください。人も同居人が暗いと困るでしょう？

いつか貴方が貴方なりに納得できる答えが出せるその時までには私もお手伝いしますから。ふふふ。これ以上は野暮なことは言いませんからね。

でも、変わらない憤りをぶつけたくなつたのならいつでも言ってくださいね。貴方の転生を心待ちにしていますから。」

~~~~~

と、言う訳で、野暮なことではないとのことだったんだけど。たまに思い出したように無理矢理転生させようとするのは野暮ってもんじゃないんですかね？良心的な神様方？おーい。

周りでアーチを作るように整列している（卒業式で見たことあるだろうか？）、見かけたことのある神も含めた神達に呼びかけてみたが、一斉に目をそらされた。

態度が露骨すぎる…。

いや、分かりますけどね？そのロリツ子が偉い上に怒ると恐ろしいし、スゴクスゴイっていうのは。逆らえん

でもさ、こんな…これは、無いんじゃないですかね？

「どんなところかのう。妾も早く遊びたいぞう。まだなのか主く？」

見て見なさいこの純粋な目を！キラッキラしとるぞう？おのれ、神様。数少ない俺の外堀、どころか一箇所、二箇所ぐらいしかないところを埋めおって！

………幼女神様、和服幼女ちゃん、爺神、e t c、

あらやだ、俺の交友関係少な過ぎイイ！！？

いや、だ、大丈夫だ、問題ない。ほ、ほら、賭け仲間の神様とかもいるし？

あ、でも、奴ら今あそこで野次飛ばしてやがる。薄情な神どもめ。

というか、だ。

だいたいにして、どうすんのこの子？俺と一緒に転生でもさせる気ですか？

この子は扱的には俺とは違うんですよね。それに、爺い神にもう会えないって伝えたら多分泣き出すよ？

”貴方だけそのまま取り残してこちらで迎えを寄越すから問題ないです。”

おおい、ちよい待ち。今喋ってたのウチの神様ですね？

声だけ変えても分かりますよ？

長い付き合いだからね、これでも。

だいたいの神様は、あんまり生き物の区別とかしないから、「やあ、そこな魂や」とか「人の子よ」とか呼んでくる。

年季入った神様とかなら、小僧とかヌシとか（隣の和服幼女ちゃんはや元々古風な感じでした）、後はまあ、知り合って慣れれば…ってところかなあ。

…お医者さんまがいの変態神さんとかはまあ…ほら、あれだから。察してくれ。あの人とか…。人じゃないけども。

アレらは今は遠い彼方にいるだろう。

歯医者の方は協力してただろう？

…色々あれからあったんだよ…。

それは置いていて。

だから、今のところ俺のこと貴方って言うの神様だけだからね。ニユアンスと字が違うのは分かっているけども、なんだい？ハニーとでも返せばいいの？

ならば言おうではないか。さあ、大きな声で。

「愛しのハニー、その可愛い姿をみせておくれ」

”…ツ!!?~~~~ツ”

と、クツソ恥ずかしいことを言うところからか笑いを堪える声が漏れていたのでもちやに耳を傾ける。

爆笑してくれてありがとうございますよ。ちくしょう。…扉の後ろにでも居るんですね？

”ごほん！そんなことよりも早く行く世界を選びなさい、迷える魂よ。”

否定しないんですね。扉の後ろ回っていいですか？

”なりません!!それよりも、隣の子が待ちくたびれておりますよ？貴方が赴く世界に、祝福のあらんことを。さあ、神達よ！盛大に祝福を!!”

その声を受けて、ハツとしたように盛り上げ始める外野神達。がんばれよー、祝福をー、などと言っているが、幸運ならば此処にあるので是非ともやめて頂きたい。

……さては、会話が面倒だからって、勢いで押し出すつもりだな？なんて残酷なことを考えるロリだ。

クラスメイト、告白、罰ゲーム、白い目……ぐすん。

勝手に盛り上がって、やらないといけない空気でシラけさせるななどと無茶を平気で言うような輩にかける慈悲など俺は持たんぞ！

ふっ。甘いな神様。俺には意味わからないほどの加護が押し付けられているのを忘れたか！

隣の少年（心満載の少女）と遊びつくしてから無理矢理帰ってきてやるわ！時間神とか空間神とかって、酔っ払いが多いからなあ！

”言い忘れていましたが、後ろで正座してる神達の加護は働きませんのであしからず。”

な……ん……だと……!?

”おやおや、顔色が悪いようですがどうなさいましたか？ふふ。これまで、貴方にはなかなか楽しませていただきましたよ。まさか、ここまで残られるとは思ってもありませんでしたから。けれど、ええ、ついに、これでお別れです。”

そんなドヤってそんな声を合図に驚く暇もなく、何故か扉に吸い込まれ始める俺氏。

え、てか、なぜに？まだ選んでもないよ？

と、思っていると、待ちきれなかったのか隣の子が勝手に指を真っ直ぐに指して決めていたらしい。

「あの世界の猛獣遊園地とやらが人気らしいぞ！」

当然、手を繋いでいる和服幼女ちゃんも一緒に吸い込まれ始めたのだが、さつきまでは期待に胸を膨らませながらも健気に待つてくれているのになんで？

と思つて隣を見ると、答えがあつた。

……いつのまにか手に握られた観光パンフである。しかも神様お手製であつた。

きつたねえ！選ばないのを見越して先導しやがつた。

しかも、猛獣遊園地……ねえ？

はい、行きたくないです。猛獣にとつての遊園地的な場所だろ？食われそうになつて逃げ惑うのか目に見えるんですけど。

俺だけね。

この子は加護なしでも元々魂からして強いからね。しかも爺い神その他によつて神性をお持ちになつてらつしやる。

表面上はそっかー、楽しみだねーと、返事をしながらも深層心理はガクブルである。

どうにかしようと思いを巡らせるが、タイムリミットが来たらしく、一気にぐいと引き寄せられる。

もはや抵抗は無駄らしい。

だが、吸い込まれながらも俺にはひとつだけ疑問が湧いてきた。

結局、今回のきっかけはなんだったのだろうか。

„行つてらっしゃいませー良い旅路をー”

「出発じゃー!!」

「絶対に戻ってみせるからなあ!」

……しまらないなあ。

という感じで捨て台詞とともに扉に吸われ、視界が光に染まる。

と、まあ、こんな風にしてついに俺は見事に転生……………

を果たさなかった。

いや、今更此处まで来といてなんだけど、しねーよ？

しつこい、くどい、と言われ続けてウン十年、でもしませんよ？  
あの情神どもの加護が効かない今の状態で転生させられちゃつたらほんとにもう終わりだから実は割と危ないところだったりした訳である。

さて、ならばどうして飛ばされたのにしてないのかって？

はい、散々伏線つぽく振つといてなんだけでも、厨二大好き転生モノってさ、手順があるだろう？それと同じだ。

先ず、行く場所を決める。

次に、意思確認。（良心的である。）

次に、魂に加護やら特典やらを付ける。

そして、飛ばす。

はい、では、どのタイミングで肉体になるのか？

まあ、ふつうに考えて神様が手を加えるか、その世界に体を作つといてそこに入るか、または、魂がその世界という枠組みに入つた瞬間に肉体になる（代わる）、かだ。

うちの幼女神は、大概は没シユートした際に見える形にしておいた魂に肉体を自動で付ける形だ。

その様式は神次第なのだろうが、俺は、そこに目をつけた訳である。

ウチのロリ神様はかなり偉いので大抵の事には顔が効く。なので、俺がほかの様式の異なる神に手回しを頼んでも、その世界ごと自分の管理下に置いてしまおうという力業を發揮することも可能な訳だ。

ならば、神達の元締めレベルに顔の広い幼女神の手の回らないところと言えばどこなのか？

それは、隣の和服幼女ちゃん……の玩具……もとい、仇敵の元神である。

元は位の低い神、邪神などと言われていたあの神であるが、あの一件で、神の称号を剥奪されていた。

つまり、種族は神だけれど力は無いに等しいような神になった訳だ。実にややこしい。



「ただけ神神言えがいいのか。というか神様にも失礼である。もちろん、幼女な？」

「やらかしたせいで、そんな扱いになった元神であるが、隣の和服幼女ちゃんの覚醒時の名残で、まあ、その、なんだ。」

「被虐体質：というか率直に言ってDMになったので、大抵蹴り上げればいうことを聞いてくださるという懐の深い神へとなっていた。」

「任される世界も無い状態だったのだが、ほかの神に比べて隠す所のない状態だった奴は、オープンなまま、取り繕うこともなく、ふらふらとしていた。」

「そのときに会おうSな魂や、同じくマゾヒストな人々の信仰を自然と集めてしまったのだ。」

「信仰を集める、ということは若干の力を増す土着神のような扱いとなり、見事、邪神以下でありながら、その実、色々な神の領域にまで密かに範囲を拡げる事に成功するという、決して少なくない特殊な趣向の者達のみ神となったのである。」

「そんな訳で、幼女になれば踏まれてもいい。」

「そんな尊い信仰を捧げて暫く、過去の因縁も何処へやら。和服幼女ちゃんのストレス発散や俺の仕事の都合で出会ったD Sな神様（お忍びで）とのパイプを受け持つ事を条件に、秘密の加護を受け取ったのであった。」

「そのため、現在は猛獣遊園地とやらに向けて歩いているのだが、今まで通り魂のままである。」

「あの時目覚めた時に感じていた違和感は、幼女神様の細工とM神の加護が互いに力が働きあつて干渉していたためだったらしい。」

そして、扉が消えてしまったのを確認し、帰りには和服幼女ちゃんに以前の様にしがみついて居れば、肉体ははじき、魂に直接作用するであろう謎ワープによって無事に帰れるはずである。

だから、私もう何も怖くない！

「おおー！見えてきたぞ主！あれが怪獣系パークとやらじゃな!?」

そう、後は、ご想像の通り、猛獣を乗り回して喜ぶ和服幼女と、涙目で追い回される俺という未来に向けて、懸命に震える己と向き合うだけである。まる。

ちなみに、神様なんで怒ってたの？

「覚えとらんのか？いつものごとくあのロリっ子神の頭を撫で取るときにボソツと子供扱いして吹つとばされだじゃろ？」

うん、そこはなんとなく。

「その後、気絶が長かった主が仕事にこんから起こしに来た口りっ子神の胸に主の腕が当たったんじやが、「……無い……無いよお……」とかタイミング悪く魘されたせいで、キレとつたぞ？」

あ、さいですか。

というか、未だに神様、あのつるぺたボディ状態に謎の自信があるよね。

そこが良いんですけどさ。

とりあえずは、俺のせいですね。はい。すいませんでした。

○○○○○○が欲しかった

「神様！チョコをください！」

「申し訳ありません。生憎と用意していませんのですよ。」

「大丈夫です！既に用意してありますので！これを渡してくれるだけで良いです！あ、こっちは普通にプレゼントです。」

「わ、可愛いですねー。ありがたく頂きます。」

…まあ、貴方がそれでよいと言うのであれば私は構わないですよ  
〜……。では、はい、どうぞ。」

「イヤッホー！！！！神様からのチョコレートk t k r  
！！ついにデレ期だー！」

「なんじゃ？この茶番。」

「爺！妾もちよこれーと？とやらを作ってみたぞ！食べるがよい。主のもあるぞー！」

「イヤッホー！！！！」

「いや、おめーもかよ。」

はっ!?

なんだ、また白昼夢か。

ん? ああ、すまない諸君。

やあ、あれからなんとか霊獣パークや能力持ち猛獣パークなんかで半分食われかけながらもなんとか生還した俺だよ。

帰還した後も、神様は、その時は戻れる筈のない俺の姿に驚いていたけれど、その後もしばらくはプリプリしていた。そのため、どうにかこうにか機嫌を取るために各所の神様軍にご機嫌伺いに行ったり、厄介な場所の迷える魂を連れ戻したり、博打してた神どもにお礼参りに行ったりと、色々と忙しくしつつも、どうにか謝り倒して、許しを貰った。

流石に理不尽じゃないかって?

いや、ご褒美だし……。

幼女だよ? しかも惚れた相手からだよ?

何されても嬉しいだけだろ? (手遅れ感)

by the way 今日、つーか、暦の概念も曖昧なんだけれども、現代的に言えば、既に言うまでもなからうが、バレンタインデーだ。

地上の様子を良く把握している筈の神様が連日全く意識していた様子が無いので既に悟っているが、デレが無い。

いや、そもそも、バレンチヌス様もこんな外側…というか、なんというか、世界観の違う神様達からすれば一魂なのだろうけれどもね。

下手をすれば、朝昼夜、一日24時間の概念すら怪しいこの場所で受け身に徹していたらいつの間にか来年になっている可能性すらあるんだわ。まじで。

ならば、こちらから動くしかあるまいて。

「と、言うわけで始めます。バレンタインクッキング👩‍🍳?!!パチパチパチ〜!」

「ワーなのじゃ!」

「…え?…はい?…なんですかこれ。」

※約一名ノリについてこれていない方がいるが気にせず進めま

す。

「進行は私と、和服幼女先生が務めさせて頂きます。」

「よろしくお願いします、なのじゃ。」

「え〜…神として長いことやってますけど私、こんなに露骨にスルーされたの初めてですよ。」

「そして、ゲストには本日のメインであらせられます我らが誇る美幼女、神様でございます。本日はどうぞよろしくお願い致します。」

「この後に及んで未だに名前が出てこないとは筋金入りじゃな〜。」

「あ、えーと、よろしくお願いします?。」

「はい、神様にも挨拶をいただけたところで、早速調理に移って行きたいと思います。」

「今日は何を作るんじゃ?。」

「はい先生。本日は現世のバレンタインデーに因んで、チョコレートケーキとハート形ホワイトチョコレートを作りたいと思います。」

「おお、手間のかかるチョイスをしたのう。」

「えーと…盛り上がってるところすみませんが、私仕事の途中でしたので帰らせていただきますね…?。」

「いえいえ、そこはご心配なく。現地協力員の爺い神さんにお仕事を全て代わって頂いておりますので。」

「妾の肩たたき券と司会のこやつ書類仕事むこう一年分で引き受けてくれたのじゃったな。」

「はははは。まったく、世知辛い話ですね。」

「そうじゃな〜。」

「H A H A H A H A H A ~ ~ ☆」

「初耳なのですが…。」

「細かいことはきにするだけ無駄です。では、流石に強引すぎたせいか疑問が抜けない幼女神様が困惑してらっしゃるので、進めますね。」

「サクサク進むぞい。」

「はい、先ずは….:…:というか、予め作っておいた完成品がこちらになります。」

「じゃーん!なのじゃ。」

「流石に端折り過ぎではないですか?!?!」

「いえ、大丈夫です。散々挑戦し続けて工夫して作り上げましたから。きつと、お口に合うと思いますよ。」

「妾も手伝ったのじゃから当然じゃ!」

「ええ、先生のご協力あつてのものです。そして、残飯&失敗作の処理は男神の方々にご協力頂いております。」

「ふっぎけんな!このダークマター食えつか!?!」

「不意をついて拉致ってきたただけだろうがこのロリコンが!」

何やら騒がしいが、気のせいだろうと思う。

「さて、尺もあまりないので、締めましょう。」

「そうじゃなー。引っ張っても甘い展開とか書かんものなく。」

「いきなりメタイのですよー。」

「お気になさらず。それでは、準備はいいですか?」

「もちじゃ!」



「はあ…付き合っただげますよ。」

「よしーといわけで、はい。せーのー！」

「ハッピーバレンタイン!!!」

この後めちやくちや、ケーキを食べた。

「zzz:。」

「さて、騒ぎ過ぎて寝たようですね。

あれから、どんちゃん騒ぎになって、散々神の相手をさせられていたので仕方ないとは思いますがねえ。

…はあ、まったく。茶化さずにちゃんと言ってくれれば良いんですけどねえ。

妙なところで照れ屋なのは一体どっちなのでしょうかね。

貴方方と違って、私にとっての一日はまだ終わってませんから。

ふふふ。甘いもののお返しですから。神からの祝福付きで渡してあげましょう。

早いところ転生していただきたいところなのは変わりませんけれど。

今回は許してあげましょうか。

言葉は不要なのでしょうけれど、まだまだ長い付き合いになりそうですね。

これからお願いしますね。」

泣き寝入りする幼女を甘やかしたかった

やあ、久しぶりだね。○リム○ンクマツチやら○ンハンにかかりきりになっていたあんにやろうのせいで、日が空いてしまったようだ。すまないね。

さてと、それじゃあ、気を取り直して、と。

鼻☆塩☆塩。あれは、3万6千…いや、18年前だったかな。彼…いや、もういいわ。彼じゃないし。幼女だし。む？けれど、神様は外見も下手すれば性格も自由自在だから性別も…。深くは考えないでおこう。

幼女は可愛い。そして、俺が惚れたのはあの幼女な神様だ。

それでいい。

てなこと、今日もこうして悶々としながら、神様の帰りを待っています。風景は今日は晴れである。が、最近は室内生活がブームなので、お馴染みの扉の間の近くに一軒家を構えている。内装は和風洋風中華風なんでもござれだ。

なぜかこれだと、料理みたいに聞こえるぞ？ま、似たようなもんかな…。

まあ、ぶつちやけその日の神様の気分次第です。だから、畳だと思つてスリッパを脱いだらその瞬間にアメリカンスタイルの床に早変わりしていて困惑するぐらいはよくあることなので、気にしたら負けだ。

手伝わせてもらっている方の魂のご案内はすでに終えている。時間の概念が曖昧なのだから常に業務は終わらないと思うかもしれないが、此処には無くても各世界には時間が流れているので順番があるのだ。召される順番という酷い言い方かもしれないが。

それに、受け入れる魂が一度に多すぎるとこんなだだっ広いところで魂に好き勝手動かれるとこっちが大変なので、そこらへんは口リ神様含めていろんな神様方と相談している。あえて、見逃して俺が泡食って追いかける様を楽しむのはやめていただきたい。

そして、本日は珍しく夕食のリクエストを出して頂いたので、腕によりをかけて作りました。

はい。満漢全席で御座います。

ちやぶ台に乗る訳ねえだろって？そこは、ご安心。ちやぶ台一つとっても神様クオリティ。拡張可能な優れものだ。

皿も同じように載せた料理が冷めず、適正温度と食べる対象に合わせて自動で調節してくれる優れものだ。

某化け物級生徒会長で初めて知ったような全種類盛り合わせの方の満漢全席じゃなくて、一般的な方のなんちゃってメニューの方な。

フカヒレスープやら小籠包やら…。とりあえず適当な中華のイメージをしてほしい。多分それで合っている。

回転テーブルじゃないのは、2人でクルクルしても虚しいことに気づいたからだ。

いやあ、案外最初は楽しいんだよ？でも、食事不要なメンバーだけど、嗜好品というか娯楽として嗜んでる訳だからさ。テーブルを回すことによる虚しい勝負の結果、食事が楽しめなくなるなんてさ。馬鹿らしいじゃないか。

人は学ぶ生き物だからな。

まあ、元な上に、何百回と同じことしてるんだけどね。そんなアホらしいやりとりも楽しかったりするのだよ。わかるかね？

幼女ときやつきやうふふ。負けませんよ。こちらこそー。：ちよ、まっ、うおおおおおおお（略）

え？ガチバトル？はっはっは。なんのことかな。ボコられて終わりに決まってるじゃないか。煽りすぎると泣き出した神様に馬乗

りになられて首から上が消滅するまで殴られるので要注意なのだがな？

あ、でも、最近は悩むんだよ。食らった方が良いのでは？と。

適度に泣いて感情を発散させたりするのと同じく、死んでるが故にいくら食らっても痛いだけで済む俺やら他の神達でストレス発散に一役買うのもアリだと思う。決して、首から上が消滅するまでの僅かな時間の可愛いビンタの感触（威力は可愛くない）と腹部に感じる幸せの重さを享受したいとかじゃあないので悪しからず。

まあ、それは置いといて。今回は特別だ。

はい、せんせー。何かあったんですかー？

はい、良い質問ですね。答えは、CMの後！

と、言いたいところだったのだが丁度帰ってきたようだ。

「ただいまです〜。」

おかえりなさいませ。神様。お風呂にします？〜ご飯にします？それとも…俺…ですかね！

「〜ご飯だけで充分ですよ。わあ、美味しそうですね。」

勘違いされないように言っとくが、別世界でも行かない限り汚れたりしないし、魂だけの俺はともかく神様はそこらへんなんでもありだからな。最後のは普通にスルーされただけだ。ぐすん。

2次元どころかその上を地でゆく神達、特に女神様達は、美少女は汚れない！を体現するため、気が乗らない限りはお風呂シーンなど拝めないのだ。

「何してるんですか？…いただきましょう。」

はい、それでは。

「いただきます。」

このあとめっちゃ中華を味わった。

さてさて、そんじやあ待たせたな。サブタイの回収のお時間だ。

食事を終えてからラフな格好に換装した神様は現在「うわーん！」とか、「ううああああ！」とかエプロンをしたままだった俺の膝に顔を埋めて唸っている。

俗にいう膝枕状態です。ふははは。羨ましいかね？（くどい

ああ、ちくしよう。逆が良かったなあ！いや、でも甘えられるのもアリだからやっぱ良いわ。

んで、なんでこんなことになっているかと言うと。

「もう…もう！何なんですか！好き放題言ってくれちゃって！だいたいにして、元は私の管轄じゃありませんよ！」

そうですね。ただでさえ神様の仕事多いのに他の神の尻拭いまで…お疲れ様です。

「まったくです！しかも、逃げてきた魂を呼び出して返したら、余計なことをしておつて☒もう…もう…ううううううう！」

よく耐えましたね。偉いです。流星です神様。

「ていうか、何回目ですか！4桁超えですよ！他の神の管轄にまで逃すようなら、無理に権能待たせて任せるんじや無いって話ですよ。生死の間に悪か善かの有無はあれども、廻る魂そのものには罪はないのですから…。」

そうつすね。元から邪悪な魂なんてシステム上はいませんか  
らねー(棒)

「というか、貴方はいつになったら転生するんですか！敵役の相  
手の魂も何故かあれから表に出てきませんし！」

うおっと、飛び火してきた。すみません。嫌です。

「知ってましたよ！ふんっ！」

むくれる幼女。可愛い(確信)

「というか未練も薄れてきたなら何故消えないんですか貴方は。」

そこは恋する漢女のパワーでがんばってみました。

「訳が分かりませんよ…。というかキモいです。」

さーせん。でも今はそれ(転生)以外なら何でも聞きますから。

「煽てたって無駄ですよ。私の役割は変わりませんから。……  
でも、もう少し膝を貸してください。」

喜んで。その気があれば何百日でも足が痺れたりしないスカス  
カソウルぼでいですから。

ちなみに、ふと思っただんですけど膝枕って、頭乗せてるところ膝  
じゃ無いですよ。正座してる状態だと膝って先の部分だけです。

丁度長いエプロンなので膝下まで隠れますけど。腿枕という  
のが正しいのでは？

「だって硬いじゃ無いですか。貴方は生前程良く筋肉が無いので、肉体を模してる今も柔らかいですけど。」

あ、そうですね。確かに膝だと骨が。

「相手が貴方っていうのが不満ですけどね…。はあ。ううう。あ、エプロン良い香りです。柔軟剤変えたのですか？」

ええ、先日お世話になった女神様のところで。飛び入りだったんですけど、女子会みたいになっちゃいまして。化粧水変えたー？あ、ならこの間仕事に行った職人の神様がく、みたいな感じで盛り上がりまして。

「えく…。何でそうなるんですか。デレデレしてたようなら八つ当たりの口実になったのに。貴方の性別変えた方が良いんじゃないかと思ってきましたよ。」

出来ればこのままがいいです。今も息子もありませんので変わらない気もしますが、胸があったら流石に動きづらくなりそうな予感がしますので。

「ふっふっふ。貴方に拒否権はありません。いつそ、抱きつきたいときは変えるのもアリということにしときます。今はコレ（膝枕）で我慢して…あげましょう。」

それはありがたい。気持ちは変わらないですけど。

「はあ…まったく。疲れました。ヒトというのも大変なのですね。」

ええ、神様が優しく頑張ってくださっているお陰で、俺も生きてい



られたんです。

「ふふ……。世界の中で生きている者たちの方が……よほど……学んで……いるじゃ……ないで……zzz」

はい、いつもお疲れ様です。

うん。さて、寝てしまわれた神様を起こさないようにベットにお運びして、偶に起こるこんな面倒な問題について考えてみようか。

とは言ったものの結論から言えば、アホな神が偉いからね。しようがないね。

隠居するまでもなく、寿命ないからなあ……。どうしようもなくないか？逆に無理にどうにかしようにも、他の神だとアホな神の力を受け入れられないのだ。無駄に容量がある。

小分けにすればいいもんでもないし。神様パワーを無闇に発揮させるのもアレだし。

というか、4桁回もよくほつといたな！と思うが、これがまた、なかなか起きないのだ。具体的には元の感覚で言うと、星がパーンするくらいの間が空いた頃に新しい神に変遷させたりするが故に起こる。

規模が規模なだけに一回ミスると、どんどん逃げてくよね。だつて文字通り世界規模だし。宇宙ごと内包した世界じゃなくて、星単位らしいけれど、それでも何個かあれば、その分生き物の数、つまりは魂も増えるわな。

今は丁度、そんな時期に当たってしまったのだ。その分神様もお疲れの様子。

なまじ、ほつとけばいいものを見過ごせないからね。

例えば、池の真ん中に浮かんでたピンポン球を見かけて、岸に着くまで待つんじゃないかと、池の中に取りに行く（今は主に俺が）。

そんな優しい神様なのだ（泣

泣いてないぞ。むしろ我々の業界ではご褒美です。

でも、担当は神様なので、立場的に俺が行く訳にも、部下の神が行く訳にもいかず…。

………うん。社員教育制度的なものか資格試験的のものにテコ入れすればいいんでね？アホな神様のところで。

てなわけで、速攻！殴り込みじゃあああああ！

幼女に無駄な重労働させんじゃねええええええ！！

その後、バット持って殴り込みに行つてボコされたりゴマすつて取り入ったり、爺い神の名前を借りて心象アップになるぞ？的なことを言つて、なんとか検討して実用して貰えるように頑張りましたまる。

「疲れたのですよ〜。うううううううう。」

けれど、暫くはまだこんな感じらしい。

いつもの凜々しい感じに戻るまで、若干嬉しく思いながらも温泉ツアーに団体で行っている他の和服少女ちゃんと爺い神を含んだ知り合いの神達が戻ってくるのを待ち遠しく思っている。

そこは変わって欲しかった



わたしの住んでる村。

この辺りの地名も変わってから大分経っているけれど、ここには外から来る人なんて滅多にいない。

同世代の子は大体引越して行ったけれど、わたしはここが好きだ。

不気味だ、なんて言われてるけど、景色は綺麗だし風は気持ち良い。

お爺ちゃんは変わってるけどお婆ちゃんは優しい。

隣のおじちゃんは遊びに行くといつも手作りの美味しいお菓子をくれるし、村長はいつも踊ってばかりいるけれど素敵な旅のお話をしてくれる。

昔はだんさーだったんだって、いつも嬉しそうに言っている。

ちなみに、お婆ちゃんは昔はかんごしさんで、隣のおじちゃんはばていしえって言うおしごとをしていたんだって。

仲の良かった子とままごとをすることはできなくなっちゃったけど、村長さんのお話を聞いたり、隣のおじちゃんとお菓子を作ったり、お婆ちゃんの手伝いをして毎日楽しく暮らしてる。

変だ変だって言われてるけど、そんなことはなくって、5年に1回だけのしきたりっていうのが無ければ普通の良い村なんだって…。

珍しく村長さんが悲しそうな顔をしてたから、きつとしきたりって言うのは楽しくないんだと思う。

村長さんと隣のおじちゃんがおさけを飲みながら泣いてるのが嫌だったから、私は、泣かないでって言った。

どうしたら良いのか分からなくって、お婆ちゃんの料理の手伝いをして、美味しいおつまみをがんばって作って食べてもらおうと思っ  
た。

元気を出して欲しかったけど、上手くはいかなくて、それでも村  
長さんも隣のおじちゃんも全部食べてくれた。

2人もお婆ちゃんもありがとうって言って頭を撫でてくれたけ  
ど、顔は笑ってなかった。

わたしは他に何にも思いつかなかったから、お爺ちゃんにも助け  
てって言ったけど、お爺ちゃんは動かなかった。

お婆ちゃんは、私がお爺ちゃんに話しかけると、悲しそうな顔を  
した。

村長さん達も、怖い顔をしてた。

笑ってて欲しかったのに、また嫌な顔をさせちゃったのが悲し  
かった。

結局その日は、私は頭がぐちゃぐちゃして、泣いて、泣いて、泣  
き疲れて、寝てしまった。

でも、朝になったら、みんないつもと同じように笑ってくれてい  
たから、良かったと思った。

別の日、お爺ちゃんに聞いてみた。

お婆ちゃんが悲しそうにするのが嫌だったから、「しきたりなん  
てやめちゃえばいいのに、なんでするの？」って聞いてみた。

お爺ちゃんは、黒いお顔を上げて首を横に振って答えてくれた。しきたりについては教えられないけれど、楽しくなくてもやらな  
いとダメなんだって言った。

お爺ちゃんも嫌なの？って聞くと、嫌だって言った。

みんなに聞いても、悲しそうな顔をするのに、嫌だとは絶対言っ  
てくれなかったから、味方ができたみたいで、少し嬉しかった。

お婆ちゃんと綾取りをした時に、お父さんとお母さんのことを  
聞いてみた。

お母さんとお父さんは村の為に頑張ってくれたんだって、お婆  
ちゃんが話してくれた。

私が聞くと、お婆ちゃんも村長さんも隣のおじちゃんも、1日1  
回だけ、1個だけ、教えてくれる。

おんなじもの、例えば、私のお父さんお母さんについて。  
絶対に、1個だけ、1回だけしか新しくは教えてくれない。

それもしきたりなのかなって思っ  
て、いやな気がしたけど、なら毎日聞けばいっかなと思っ  
て、気にはしなかった。

お爺ちゃんもお婆ちゃんに何か聞こうとしてたみたいだっ  
たけど、お婆ちゃんは聞こえてなかった。

私が伝えようとする  
と、真つ黒な手で、お爺ちゃんはバツテンを作  
ってた。

手を口の下あたりに持っ  
て行ってナイショしてた。

お爺ちゃんは、相  
変わらず変だった。

3つのおつきな山にぐるりと囲まれているうちの村は、出入り口が一つしか無い。

遠くの大きな町からひたすら真っ直ぐに舗装されていない土の道路を来れば、この村に辿り着く。

村の出入り口は、遠くから見たら、山に付いた大きな口に見えるんだって村長さんが言ってた。

ここは嫌だって言っていたみんなはそこから出て行ってしまっただけで、わたしはそっちには行かない。

なぜなら都会って聞くと、どうしても怖くなるから。

お父さんもお母さんも都会へ行ったきりもう戻ってはこなかったから。

その当時のわたしはしばらくは寂しくって、毎日いろんな人になんて聞いて回った。

わたしが聞くと、大人の人はみんな怖い顔をした。

引越して行く前に年の近いみんなにも聞いたけど、分からなかった。

お婆ちゃんに聞いても、隣のおじちゃんに聞いても、村長さんに聞いても、みんな俯いて答えて来れなかった。

みんなに聞いても分からなかったけど、お爺ちゃんだけは口元が笑ってた。

お父さん達はカッコよかったぞって、言ってた。

お父さん達のことを認めてくれたような気もして嬉しかったけど、会えないのが悲しかった私は、嬉しかったのと寂しかったのがごちゃまぜで、涙が浮かんできた。

それに気付かれるのが嫌だったわたしは、お爺ちゃんなんて嫌  
いって、お爺ちゃんのせいにして隠れた。

真つ黒なお爺ちゃんは、私が次の日に謝りに行くまで、膝を抱え  
てるみたいにしばらく丸くなったた。

今思うと、いじけていたんだなって分かってなんだがおかしくつ  
て笑った。

最近、またあの時みたいに、お婆ちゃんも村長さんも隣のおじ  
ちゃんも俯いて、あんまりお話をしてくれなくなった。

しきたりが近いから、あんまりお話をしちやダメなんだって言っ  
てた。

不意に思い出して、お母さん達のことを聞きたくなったので、お  
爺ちゃんに話しかけたんだけど、お婆ちゃんが悲しそうにするから、  
辞めた。

結局その日もお父さん達のことは分からなかったけど、お婆ちゃ  
んがコツソリと、お父さんとお母さんはけいさつかんだったんだって  
教えてくれた。

わたしは聞くことができ嬉しかったけど、やっぱりお婆ちゃん  
は悲しそうだった。

その日はお婆ちゃんにひどいことをしてしまったのが悲しくて、  
がんばって夜ご飯を作った。

たくさん集めた山菜の天ぷらはうまくできた。作りすぎちゃっ  
たから、村長さんと隣のおじちゃんにもおすそわけした。

みんな喜んでくれた。



お爺ちゃんは、相変わらずご飯を食べにこなかった。

わたしも今年でもう10歳だから、しきたりを教えてくれるらしい。

聞きたいけど、聞きたくない。

そんな風に思って、昔の自分にも嘘をついてるみたいで、少し怖かった。

翌朝、お婆ちゃんが起きてこなかったから、代わりに朝ごはんを作ってから、お婆ちゃんを起こしに行った。

お婆ちゃんは冷たかった。

村長さんが、町のお医者さんなんかを呼びに行ってくれている間、隣のおじちゃんは山で引き継ぎの報告をしてくるって、行ってしまった。

頼れる人がなくなつて、家がすごく広く感じた。

お爺ちゃんはいつの間にかいなくなってた。

さみしいよ…



はい、つーわけで、変わりました。

お爺ちゃんこと、俺です。

え？意味わかんねーって？

そうだな。俺も分かんなかったよ。

なんせ…

駄神 「レトロゲームすんべ。」

駄神 2 「なら、ロリっ子神のどこの奴巻き込まね？」

駄神 3 「あのロリコンかww」

駄神 s 「よっしや行くか」

というクソ凄まじく迷惑な理由で巻き込まれたのだから。

こっちに送られてくるようなもの、しかも博打好きな駄神連中が好んで集めてくるゲームとか曰く付きで無いわけがない。

酔っ払いどもがいきなりやってきたと思えば、そのまま古い箱のようなものを作動させた。

体験型シミュレーションほにやららくをどう扱ったら(お仕事モードじゃなかったとは言え)かなり格上の神を巻き込めるほどの呪いの品物に出来るのだろうか。肥溜めに漬けて込んで7日7晩ハンマーで叩き続けたりしたのか？

せつかく神様と和服幼女ちゃんといいでに爺い神とひよっこり遊びに来た変態(コノエ様(仮))と他の駄神様達と始めた覚えの無いばーちーをしていたというのに。

ピカツと光つたら意識だけ吸い込まれ、切り離しに成功した神以外はほぼ全員がゲーム(箱)器の中へ。

まあ、余興としてはいいんだらうね。神様達にとっては。なんてことはないレベルのことなんだろうよ。

俺「…は？」

神様「…え？」

和服幼女「…む？」

爺い神&他「「…おつと？」」

神様にとつてはなア!?

そして、なうろーでいんぐ(殺意)

カセットは1本のなので、だいたい近い場所から役割を与えられてロールプレイ(強制)を開始。そして、神様仕様のため、本編がクソ長い。それこそ初期の頃のキャラは既に退場(寿命にて死亡判定)。誰が考えたのか分からんが、なかなかクソ。

退場したり役割的にまだのプレイヤーは観客席っぽいところで寛いでいて、本編に出番がある間はその記憶にプロテクトがかけられ

る。そこらへんは御都合主義だ。

俺の感覚からすれば異世界のゲームであり、日本っぽい世界が舞台なのは普通に偶然である。

ストーリー的には、都会（闇）と田舎（山）の間で色々と問題やら揉め事が起こるうちに戦争一歩手前までいった国。

その国を守護する存在が、度重なる争いの悪感情や信仰の廃れによって黒く大きなダイダラボッチのようなナニカに変貌する。

いつしかその国では巨大なナニカに対抗するために国の中での抗争などは無くなりはしたものの……というテンプレスタイルなスタートである。

ちみもーりよくが溢れかえっちゃうのおおおお☆どうしようか？というやつだ。

プレイヤーは山に囲まれた村からスタートし、あらゆるプチイベントによって発生する異形やらナニカやらを倒して行く。

都会に出向いて既に国を乗っ取った異形のナニカを相手取るか、村に残って山の神域を守るかを選択する。

個人のゲームオーバーの条件は、死亡すること。

バットエンドの条件は、敵ボスが山の神域に到達すること。

敵のポップイベントによってはペースを選ばないが、5年に一度は必ずチートボスが発生し、チートボスはほぼ倒すことは不可能。但し、村から都会へ人身御供をすると、一時的に封印可能。

プレイヤーのレベルをカンストさせてチートボスを倒すには、少なくとも50年はかかる。だが、他のプレイヤーを含めた自キャラ以外の信頼を失ったり不安を抱かれると弱体化。

そのため、一人で黙々とレベルを上げてきたところで、チートボスに挑むための用意には必ずほかの人々と関わらねばならないため、相当運や巡り合わせの時期が良くなければ（ダイス判定かランダム）信頼を勝ち取ることは不可能。

そして、村から人が居なくなれば終わり。プレイヤーの登場時期は完全ランダム。村に人を無理やり連れてくることは不可能。村人

や偶然にも同じ時期にプレイヤーとして発生した場合、話し合いや信頼を勝ち取るなどで、都会へ犠牲になりに行つて都会から人を戻すイベントを開催するなどなど。

運ゲーの要素も深く、キャラには寿命がある。

ふむ……………。

正直無理ゲーでしかない。

そして、村人も最早2桁を切つてしまいゲームオーバー一步手前になったので、残つて居たプレイヤーを投入。但し記憶は無い。設定にはだいたい忠実だが、人柄は個人による。罰則もある。

で、ダイダラボッチ（チートボス）の発生時期に合わせて何百年もの間、村人のうち一人しか見えないという謎位置のキャラ（一定の行動のみ、そして条件を満たしている時の特定キャラの喋れない置物）として活躍してきた。

ぶつちやけ、5年に一度つて目安があるから俺の居る意味はないに等しい。

それに、俺だけ異形サイドと言っても過言ではない。だって、俺だけ寿命が無いようなものだもの。というか、真っ黒い人型の物体だからな。今の俺。

そんなコンセプトゆえに、唯の鬱ゲーと化したこの世界で、異形側につこうという酔狂なプレイヤーは出てこないのだが、対キチガイの案として、異形側とはシステムの相容れないこととなっている。

てか、信頼勝ち取るキャラゲーなのに恐怖政治がまかり通ることとかぶつところせくくの的なノリはあかんでしょ。バッドステータスどころか恐らく強制退場だ。

プレイヤー側が負けたら曰く付きのアイテムよろしく呪いを受けるのだが、生憎今参加して居るのは文字通りの神様たちのため、そんなものでどうにかなるはずもない。

本気を出すと死ぐらいどうとでもなるのだ。

ならば、別に困ることは特に無い……んだけれども……、神様たちは良いんだよ……。

メンタルとかいうステータスははないに等しいようなものだから（ロリ神様は別。）駄神が発狂しようが知らねーし、酒飲ませとけば次の日には復活してるような連中だし。変態とは言え医者兼カウンセラーまでいるんだし。

ロールプレイを楽しむってそういうことなんだけれどもね  
………？

記憶はゲーム終われば、ワイワイ語り合う（意味深）ために残るんよ。今回は普通に酒の肴になるだけだけど。

でもね？

村人が減ったから最終局面入ったわけじゃん？

そつから先は、どううまくいっても人が大勢まで増えるつてのは無いんよ。だって、繰り返したところでループするだけだもん。

そうならないための鬼畜なイベントでもあるんだよ。バットエンド回避はほぼ不可能にしようとしてるあたりが呪いなんだから。

でさ？

まさかの、主人公ポジなんだ……よね。

ロリ神様が。

唯一そーゆーのに耐性の無い神様が。

終わって泣かれて（そしたら俺も死ぬ）暴れたら、マジで洒落に  
ならんよなあ……

あと、幼女ガチで泣かせるとか（弄り以外）、ありえんだろ

ちなみに、爺さん（黒子&お告げ役）が俺。

黒子なのでメタ発言は出来ない制限はあるが、記憶があっても問題無い立場なので今こうしている。

婆さん役がウキウキとして役に徹する和服幼女ちゃん。

意外と言えば意外だが、女優気質だった。

看護師の過去有り。都会の暗いイザコザで訳ありで村に来た設定。キャラとしての婆さんが幼い頃に村から移動したのは知っているが、和服幼女ちゃんが参戦した正確な時期は不明。

隣のおじさん（元パティシエ）は、普通にNPC。

生い立ちに、能力者としての技能を持ったプレイヤーの神が関わっていたために、山の神域に出入りできる。この役目は基本どの時代にも一人はいる。が、自由な行動ができるかは、初回のダイスに



よって決まる。つまるところ、ランダムで運ゲー要素。

村長。酔っ払った神。

以上。元冒険家兼ダンサー兼払い屋。特殊キャラで記憶があるが、制約が多い。そのため、俺と同じく本編にあまり強く影響を及ぼせない。村長としての人格も残っているため、役に徹する。ハツチャケ具合はまるまる本人（神）の影響。

恐らく大丈夫だとは思いますが、加護を貫通する可能性が捨てきれないこの呪いゲームに対して。

俺に課されたミッションは、いつも通りといえればいつも通りだが…。

幼女に笑<sup>ハッピーエンド</sup>顔を。

それだけである。

とつととクリアしたかった



あれから、3日が経ちました。

目が覚めないおばあちゃんはあれから山のお医者様に運ばれて行った。

私も行きたかったけど、村長さんと隣のおじさんがおばあちゃんを絶対助けるから、だからどうかここに居て欲しいって、頭を下げてお願いされた。

村長さんとおじさんが真剣で怖かったけれど、怯えているみたいだったから、私はその通りにした。

私が頷くと、おじさんは安心したように、村長さんは悲しそうに、それぞれ山と街の方角へと出かけて行った。

次の朝、村長さんは帰ってきたけど、隣のおじさんが見当たらなかった。

村長さんは俯いて、もう帰ってこれないんだって言っていた。

おばあちゃんは、大丈夫だから安心して欲しいって。

だから、おじさんの為にも私には泣かないで笑っていて欲しいって言っていた。

どうしてなのか、全然わからなかったし、認めたくなかったけど、村長さんが箱に入れていたのは隣のおじさんがした指輪だった。

おじさんの奥さんとは会ったことなかったけど、いつも大事そうにしていたのを覚えていたから、私は何も言えなかった。

上手く笑えたか分からなかったけど、おじさんに笑顔でありがとうって言って、村長さんは泣きながら、私は笑顔で、山の入り口を閉じた。

でも、その夜は我慢できなくて、またスツと現れたおじいちゃんのところまでコツソリと泣いた。

次の日、村長さんは私に謝りながら街へ出て行った。

夜までは誰が帰ってきてても良いように準備をしたり野草を取ってきたりしていた。

夜になって帰ってきた村長さんは、首から上が無かった。

止めたかったけれど、驚いて私が固まっている間に、フラフラと歩いて、村長さんは焼却炉の中へ消えて行っちゃった。

また、一人になった。

一人でぼんやりと考えていたけど、答えも出ず、ふと顔を上げると、村長さんが帰ってきた方に違和感を覚えた。

遠くにぼんやり見える黒いおじいちゃんみたいなでっかい奴。

アレが、少しずつこっちに向かってきていた。

本当なら怖くてたまらなかつたんだろうけど、私はこの先の不安と、一人の寂しさが強くつて、どうでもよくなっていた。

街から飛び出した光が黒くて大きな奴を止めたり、突ついたりしていたのを、腕の一振りで薙ぎ払っていたのを見たからか、ひと思いにやってくれるかなあ、なんて考えていた。

おばあちゃんにもおじさんにも村長さんにも怒られちゃうかな。

一歩一歩は遅くても、向かってくる影はとても大きくて、もう少ししたら村に辿り着いて潰されてしまう。

そう考えると、みんなの顔が浮かんで、頭を振った。

生きてって、言われた気がした。

凄く身勝手な考えかもしれないけれど、皆んなで私に生きて欲しいって願ってくれていたのかもしれない。  
だから、しよげてなんていちゃダメだ。

私は待つ。

村から出ようとは思わなかった。

私には出来ることが分からないけれど、誰かがまた帰ってきてても

大丈夫なように、

笑顔でおかえりを言ってあげられる、おばあちゃんみたいに。

今だけ、ここに踏みとどまる勇気を貸して！

私に、村を守る力はないし、

もうすぐ辿り着く影が恐ろしくて上手く動けなかったけれど、

それでも、私はここを守りたい。

いつの間にか、目の前にいたおじいちゃんが、私に手を差し出して  
いた。



気弱な主人公。

周りの喪失。

ラスボス接近。

そして、立ち直る…と。

覚醒フラグじゃね？

はい、てなわけで、おじいちゃんたる俺、頑張りました。そりやもう、キャラ的な制約の穴を見つけて駆けずり回りまじよ。

隣のおじさん役のNPCが山に身を捧げることでおばあちゃん役の和服幼女ちゃんがEDに出られるようにしてた時は、村長（中身は神）と街まで行って、戻るように住人を説得したり。

奪われたアイテム（霊体）を村長の使い切り技能で浄化させたりやら最終決戦に向けて引きこもってた他のプレイヤー（神）を引きずり出したりとか。

ロールプレイしてるところ悪かったが現実に引き戻すためにドツキリ仕掛けたり、そいつに妖怪封印のデスマーチさせたり。

その間、ロリ神様一人になってること気付いて一回戻ったら夜中に一緒に寝ることになって尊死しかけた。

控えめに言っても俺に取っての最高の時間だった。

その分、泡食って山の神に土下座しに走り回る量が増えて、村長がついに消えたりした訳だが。

おばあちゃん（和服幼女ちゃん）と主人公ポジ（ロリ神様）だけになってしまったので、グッドエンドなんてハナから無いことは分かっている。

それに、ラスボス倒さんと返してもらえないからほぼバッドエンド確定だしな。

ラスボス、ダイダラボッチさんは着々と進んでおり、もうすぐ村を踏み潰して山へ辿り着く。

アイテムとデスマーチさせて消滅した残りプレイヤーの結界もあんまり持たんで、打つ手がほぼ無い。

だけど、震えながらも健気に立ち上がった幼女が頑張ってるのに他の奴らが黙って見てられるほどおとなしいわけがなかる？

ロリ神様の正面に立って考える。

村長が消えた時点で村の復興はもはやあり得ないので御都合主義ハッピーエンドは無くなった。

そのため、ラスボス倒しても呪いは食らうことになる。だが、神様達は死ぬとかそーゆーのは無いだろう。

防ぎたかったのは、その余波で見る悪夢なんかで、それに耐性のないロリ神様が怯えてしまうこと。

…なんか、初めの頃に比べて随分と軽い気がするのは気のせいだろうか？

なんか、条件クリアしたっけ？

…あつ！なるほど。

だから、肩の荷が降りたようなこの感覚なのか。

ロリ神様と和服幼女ちゃんもとりあえずは、ラスボス倒せば生存ルートだから退場したキャラそれぞれに対応して配られるだろう呪いが軽減されたのか。

だから、恐らくヤバいのは俺だけですわね分かります。

……駄神達の加護あるし……大丈夫……だよ……な？（震え声）

貫通……しない……よな……？

いや、とりま、それは置いといて。

でも、やつぱり幼女の涙は嬉し涙でなければならんで、何が何でもラスボスは倒す。

方法が……あれ？積んでね？

いや、待て。一個だけあるぞ？

俺が、ラスボスに成ればいんじゃないやね？



どうやら、元々そーゆー裏切りのルートもあつたらしいし。  
いけるだろ。多分。

その後に、呪い倍増してくらったり俺だけ出られなかったりだとか  
は……まあ、考えないようにして。

はあ……アホらしい。俺も好き勝手やってきたけど、最後が駄神  
の酔っ払いかあ……。

最悪、記憶戻らなければそのままプレイヤー解放されて終わりな  
んじや無いかなあ。

幼女が泣かないですんだと考えれば良いんだけどね……

俺、実はホラー……苦手なんだよなあ……ロリ神様ほどじゃ無いにせ  
よ、実は結構虚勢張ってました。

他の神がそーいやあいついねーな？つて思い出すまでしばらく  
……ボツチかなあ……。

はあ……幼女成分も無いから、俺の魂消滅しちゃわね？

……うはは。笑えねえ。

でも、まあ、頑張るかね。

目の前のとてもかっこいい幼女に手を伸ばす。

でも、その幼女は手を取らず、震えながらも一人で立ち上がった。

？あれれ？成長しすぎじゃね？

いや、おじいちゃん嬉しいけどさ。

ああ……なるほど。

手を下げて、肩をすくめる。

すると、目の前の幼女も呆れたように笑う。

背後には最早避けようもない黒い影。

…まあ、俺も黒い影なんだけどね？

「どうしましょうか？おじいちゃん？」

「どうしようね？孫ちゃん？」

お互いに挑発するように呼び合う。

「ふふふ。何ですか孫ちゃんつて。それに、声震えてますよ？  
そんな状態で大丈夫なんですか？」

「問題無いですよ。その為にいろいろ準備したんで。主人公は  
ドーンと構えといてください。…それしか役割無いでしょうし…」

「ほほう？そんなこと言つて良いんですかね？震えてるくせに。  
取り残されてもサルベージしてあげませんよ？…まあ、人の寝顔を勝  
手に見てた不敬者には仕方のない罰ですよね？」

「最高でしたよ！…あ、はい、スミマセンでした！強がつてまし  
た！この通りでございます！どうか、何卒ご容赦を！」

「…貴方の飛び上がり五体倒置も見慣れてきましたね。」

「更に空中で三回転捻りを加えて菓子折を背中で渡す大技もあり  
ますよ？」

「ふふ。それは、また今度見させて貰いましょうか。」

「…練習しときます。」

さて、

ずっと、無視していた地響きもすぐ後ろまで来たことだし。

そろそろ、終わりにしましょうかね。

ほんと、土壇場でかつこいいとか、この幼女、ズルイよなあ。

割とガチで泣きそうだったわ。

甘えっぱなしで、情けない限りだが、不安も全部消し飛んだし。

行くゼイ！

変☆身!!

その後ラスボスと身体の取り合いになってメチャクチャ後悔した。

とある村では山から帰ってきた祖母と孫が幸せそうに暮らし、街から戻ってきた若者たちによって少しずつ復興されだしましたよエンド。

そして、退場プレイヤーには、キャラにちなんだ呪いが配布され、悪堕ちプレイヤー（一部神と俺）には一番降りかかり、暫く悪夢に魘されていたという。

後で知ったが、魂ごと傷ついて消えかけた俺は神様が引き上げてくれたらしい。

ありがたや…。

「ほーら、そろそろ目を覚ましたらどうですか？」

む？この声は神様の…そして後頭部のこの幸せな感覚は…膝枕

!?

「そうですよ？貴方の大好きな膝枕です。」

おお…俺も頑張ったからなあ。そっか…神様もついにデレト…

「ワシの膝じゃがな。」

あ？

「ふふふ？…どうですか？…どうですか？最高の感触でしたか？」

「どうじゃ？…妾の提案でドッキリしかけたんじゃが！ジジイの膝で満足気に頷いて…NDK？…ってやつじゃな！」

「ええから、早起きんか。ワシも足が痛くなってきたわ。」

幼女はとても良い笑顔で笑っていたけど、なんか違う感があつた。

そして俺はその後暫く、泣きつづけ、酔っ払い駄神を吊るしあげた。

宅飲みは、暫くゴメンだ。

## 伏線だけ貼ってみた

忘れた頃にやってくるゾ。

そう、私だ。

は？誰だテメーって？いや、だから私だって。ほら、いたでしょ？結構前だけどき。ほら、流行ってたから乗っかってみた話の主人公的なね？

……ね？（分かってくれよ的な涙目）  
ぐすん。

茶番はさておき。いや、泣いてねーよ。ホントだよ

まあ、今回もいつも通り俺主体でとりあえず神様にちよつかい出す感じで進むと思われr「残念ですが、そうはいきません。」

いつもの冒頭をちよん切って現れたのは背中に○ヨジヨの様な擬音（可視化されている）を背負った幼女。

その”ばーん”って文字背負ってきたんすか？顔は劇画みたいになってるけど可愛いなこの幼女神。

「……。」

…あ、スルーなんすね。思考は聞こえてるのに返事が無い。そして目で催促されている。

…進めろと？

じゃ、改めて。こほん。

おや、神様。お久しぶりですね。

「ええ、お久しぶりです。約一月ぐらいですかね。」

そうっすね。だいたいそんなもんですね。

む？（ゲームから）脱出してからの話だぞ？投稿日時の話じゃないからな？

「はい、メタいですよー。それに、もう忘れられてますから空いた日数気にしてる人なんていませんよ。」

○ルータス、お前もか。

まあ、悲しくなるだけですしネタがないのを誤魔化す文字数稼ぎと取られるので酔っ払いへの口撃はこの辺にしときます。

ふむ、それでは俺主体じゃないってのはどうゆうことでせう？

「はい、良い質問です。それなのですが、ほら、私はいちよう他の神の相談も受けているでしょう？」

？ええ、そうっすね。あの偶に厄介ごととも混ざる相談所ですよ。ね。

「貴方にも何度か頑張って頂きましたね…その節はどうも。」（社交辞令）

いえいえ、こちらこそ。手伝わせて頂いて。（社交辞令）

「はい。それでは本題ですが、ある神からのお便りが届いてまして。」

お便り？そんなシステムあったんですか。

「ええーと、ペンネーム#雀士の神より。」

,,, いつの間にか住み着いてたモブの魂が最近私を差し置いて主役張ろうとしているみたいなのでお灸を据えて欲しいです。報酬は新しい雀卓<sup>,,,</sup>,

だそうです。」



神様ペンネーム付けんの？ってのは置いて、雀士の神って、あの酔っ払い神供ですね。またおまいらか。

そして、その依頼内容…もしかしなくても俺のことですか？別に主役貼ってるわけじゃなくて語り部的な位置というか、コンセプトの使用上可愛いロリ神様を愛で隊の隊長故というか…。

しかもシレッと雀士の神、主役張ろうとしてるし。報酬雀卓だし…

「あはは…。申し訳ありません。本来このような内容は弾かれるんですけどね…。ええーと、非常に言いづらいのですが、新しい神からの貴方へのヘイトが…多くてですね。ここらで一度娯楽を提供する方向でご協力をお願いしたいのですよ。」

えーと…。ああ！要はまたいつものやつかみですか。

説明しよう！うちのロリ神様は凄く偉いので、（ロリ神様のお仕事他の）事情を知らないほかの神からは、亡者的な扱いの俺みたいなのは蠅のような感じで見られている。

ただの魂ごときが何シレッと一緒にいやがんだテメー、みたいなヤンキー思考で絡んでくるのだ。

ちなみに、事情を知っていても特に変わりはない。

勝手に残っているだけなので否定しようもないしな！

そこは、俺の我がままのせいなのでどうしようもないね。悲しいねバナージ。

「にわか○ンダムネタを挟まないで欲しいのですよ（ボソツ）」

ほほう？○リキュア見て、変身してノリノリだった幼女がいうジヤマイカ。踊れてなかったですし。まあ、可愛かったけども。正直萌えた。

「…ぐつ。これだからロリコンは…」

はっ！例え本人だろうと幼女神様命…否！幼女魂は、一片の否定さえもさせませんとも。

「そんなことだから和服幼女ちゃんにウザがられて凹むことになるんですよ！毎回毎回、反省というものをしないのですか！」

しませんね（真顔）

「即答!？」

幼女への愛は無限大ですから。というかそこは、嫉妬してくれても良いのでは？

あの子にばかり構ってないで私にも構ってくださいよ（ボソツみたいに。うん。なかなかイイっすね。

「相変わらず気持ち悪いですね。なんで貴方を喜ばせなきゃならないんですか。まあ仕方のないことです。貴方に神目線での会話なんて期待してませんから。」

神様こそ。その優しい罵倒で俺が喜ぶのをまだ分かっていないんですか？神のくせにかぶれすぎなんですよ。これだから幼女は最高だぜ。

「は？」

「あ？」

「……………いきなり口で話すから驚いたんですけど。貴方の声久しぶりに聞いた気がしますよ。」

「俺も久しぶりにちゃんと会話しただけがします。」

「私の千里眼ありきで会話しなくてくださいよ…」

「すみません。なんか癖で。」

「ふん。まあ、良いですよ。というか、文句？を言いますけど、たいにして私に○リキユア勧めたの貴方じゃないですか。ここに回線つなぐの苦労したんですよ？」

え？。幼女が○リキユア見るのは常識ですよ？

「どこの常識ですか。ロリコンの常識ですか？」

世間一般の共通認識ですよ？少年が戦隊モノかライダーにハマって幼女と少女はお姫様に憧れるんです。そして、その様子を微笑ましく見守るのが我々の使命です。」

「思わず途中から口に出すぐらいには本気で思ってるんですねその犯罪思考。…というか、話全然進まないじゃないですか！」

えー…神様が振ったんじゃないですか。それに、最近神様忙しかったので会話が足りませんですしおすし。もつと幼女と戯れたい…

「こほん（無視）。えーと、それでは本題に入らせて頂きますね。」

よしきた。それで、具体的には何をすればよろしいので？

「切り替え早くて助かります。えー、簡単に言うんですけどね。私の管轄ではない貴方のご同輩と言いますか、ご同郷の方々のお相手をして欲しいのですよ。」

はい？日本人ってことですか？

「む。大抵はそうなのですが、日本…というか地球と言いますか。宇宙を含めた貴方の世界と近いところから来られた困った方々ですな。」

ん…？困った？あー、俺と同じ病気ってことっすか？あ、幼女魂は病気じゃなくて誇りです。

「はあ…。そのような認識で間違いはないです。転生させろとか力を与えよとか五月蠅いんですよ。ですので、そこに貴方をぶつける事で面白い反応を見せてもらおうついでに仕事を押し付けちゃおう、という作戦です。」

後半が本音ですねソレ。要は仕事面倒だから任せて笑い話だけ報告させる的な奴ですよ絶対。

ちなみに、説得っつーか、対応した後はいつも通り流すか渡すか戻しちやって宜しいので？

「はい。記録は自動で取れるようにしてありますのでクレーム、もとい、絡まれて頂ければ結構ですよ。善神の暗黙の了解で、迷ったり紛れ込んだりじゃった魂はちゃんと話を聞かないとダメっていうのがネツクですよ。」

新人というか新神さんにはまだ辛いつすか。フラフラつと逃げ回る魂多すぎなんですよ。自動で消えるか変わるか流れるかしてくれば楽なんですけど。

「それもぼちぼち対策しないと行けませんね。新たな神達に、貴方ぐらい凶太い精神を鍛えて頂くためにも、長い時と適度な休暇は必要ですから。」

はいはい。要件は了解つす。それと今更ですけど、ある程度仕事終えたら褒美に転生させてやろうとか、新神に吹き込んだりはしてませんよね？

「……………」

あ、その発想は無かった感じでしたか。言わなきゃ良かった。まあ、戻ってきますけど。

「はあ…（諦め）。それでは、迎えが来ますのでお願いしますね。」

ういーす。神様も根を詰めすぎないでくださいね。

「貴方に心配されるほど弱ってませんよ！」

おっと、怒られた。それではいつてきます！

てなわけで幼女との会話で気力を発揮した俺は次回から拗らせ同類との闘い…SAN値の削りあい挑みに行くのだった。まる。

「ナレーション下手ですか。」  
ほっといてください…

痛々しさに転んでみた

誰もがきつと目指したことがあるはずだから、俺はその感情を否定しない。

「ふっ…：貴様が神か？我に救ってほしい世界でもあるのならば告げるが良い。協力してやろう。」

ソレの対象が自分なのか世界なのか出会ったこともない他人に對してなのか人以外に對してなのかはそれぞれであるが、同じジャンルにハマった者を同士と呼ぶのに抵抗が少ないことは多いかもしれない。

「ああ、偽りの役割を受けて幾星霜。この時をどれだけ待ちわびたことか!!」

例えば幽霊の話がある。

見える者にとっては、現実で、

見えない者にとっては、妄想で、

理不尽だと叫ぶものもいるだろうが、大衆の意見が常識という言葉の着ぐるみをきて少数を押しつぶす。

……若干触発されてうつつたかな。えっほん。

覚めたら夢であったとしたら少しだけ涙目で起き上がることとなるかもしれない。

「この我に目をつけたことは流石であるな。神よ。だからこそ、遠慮は要らない。簡潔に告げるがいい。」



まあ、今痛いことに変わりないんですけどね？  
ほら、厨二病って、パワーあるワードですからネ。

「あーはい。そーゆーの良いで、とりあえず選んで下さい。今すぐさよならバイバイするか、悩みがあればカウンセラーさんに相談するんで。……特に経歴に問題はなささうですし。次の方のところ行くんでその紙に丸つけて下さい。はい、これペンね。じゃ、後は適当に殺りますんで。それでは。」

「なんだと…!? たわけた事を抜かすな！ さては、誤魔化そうとしておるな？ 我を転生させるために呼んだのであろう!? そして、最後なんかニユアンス違くないか!? …おい！ 答えろ、神よ！」

はい、どうも。

素直に今の気持ちを言っていないかな？

『……………うわあ。めっちゃ帰りたい』です。

マジかコレ。え、あんなんばつかなの？いや、昔は俺も人のこと  
言えなかった時代もあったけどさ。

一人称我って…。しかも、キヤラ崩れてるし。いやあ、その、ね  
？俺と似てるぐらいのオツさん…：はい、ごめんなさい。見栄張った  
わ。

まだ、あの人が若いよ。ギリ厨二やってても大丈夫なみためし  
てるもの。てか、未成年？

ふふ…。つまり、目の前の青年より明らか年くってからも病気  
だった俺の方が遥かに痛々しいというね。うん。

実際こんなところきたらテンション上がるのは仕方ないけどね。

俺ももしここに来た時にあんなテンションだったら今頃は神様  
に物凄い弄られてたんだろうなア。

え？残ることは確定なのかって？

いや、そりやそうでしょ（断言）

あ、でも、幼女に弄られるのも…：（末期）

というか、あの新神様も大分対応慣れてんね。美神さんなのに  
めっさ塩対応だし。あ、でもあーゆー感じの神連中って、だいたい性  
別関係無いんよな。年季入ってなくても姿変えられる神様ってたま

にいるし。まあ、どうでもいいけど。ウチの幼女神様以外に興味ないし。

つーわけで、もうなんか見えて痛々しいし、あの新神様もしっかりしてるし、帰って良いですかね？

「駄目です、仕事して下さい。てか、やれ。」

「…うつす。」

「は？」

「かしこまりましたでございます!!!」

あ、どーも。こんちくわ。(挨拶2回目)

本日は、週間幼女日和(自費出版)を極東の神相手に布教していたのがバレてめっちゃ怒ってるロリ神様に連れられて前に言ってた、迷える魂達の相手をしにきました。

ん？

ああ、そうだよ？相手は迷える魂さんだよ？

言わずもがなわかると思うけど、ここに来るのは転生者とかじゃないからね。

しかも、呼んだわけじゃなくて迷い込んできてるだけという…。

いや、しかたのないことではあるんだよ。基本痛々しい言動してることからわかる通り、迷い込んできてる魂達って若々しいのが多い。

幼女神様が少し言ってた通り、基本同じ世界で魂を循環させてるシステムってのも万能じゃない。

ちゃんと往生するまで生ききった魂でも、真っさらにしてから次に廻す際に、本当にごく稀に、昔その魂の持ち主が持ってた願望に引つ張られて記憶に蓋をした状態で、枠の外に飛び出したりどっかに迷い込んだりすることがある…らしい。

らしいってのは、ウチの幼女神様のところとはシステムが違うから俺は詳しくないからだ。

うちのロリ神様、そんな無責任にホイホイ転生させて遊んだりしないからね？

むしろ神の中でオタク文化に触発されてそんな遊びを始める奴がいる始末だから手に負えない。

そりゃあ、偉い神様達が本気出して他の神のところも管理すればウン千年ぐらいは取り逃がしも無く輪廻やらなんやらは回るらしいけど。

でも基本酔っ払いだしなあ…。神様モードより今みたいにどんちゃんしてる方が楽しいって神様ばっかだしなあ…。

…：取り敢えず、そっちの話は置いて。

本日のお仕事の確認だ。いつの間にか一瞬でテレポートしてしまった神様が残したメモ書きを見てみよう。

てか、あれ？置いていかれた？

ここの詳しい座標知らないんだけど…。あと、期限いつまでなの？神様の休暇って、下手すりやめっちゃ長くない？それこそ、最近の神様の有給って……………。

はあ……………。

えーと、なにになに？

この広間で、比較的若い神様達の代わりに厨二全開の方々の相手をするだけの簡単なお仕事です。

一人一人きちんと（裁量は任せます）お話を聞いて、同意書にサインを貰って、返してあげましょう。

尚、経歴は記されている通りなので特殊な事情がない限りは、カウンセラーに任せるのはやめましょう。カウンセラー役の神達からも休暇申請が止みません。まじほんとお願いします。

（ここからロリ神様ですはあと。）

以上です。反省するまで身悶えしながら仕事して来て下さい。  
い。

サボったりしたら2度と口聞いてあげませんからね、

新神達は、和服ちゃんと一緒に神複数名でツアー旅行に行ってもらっていますので、その間にケアします。

私も行きかけたのですが、仕方ありません。持ち回りですから

ね。

い。 …… 貴方の分のお土産も頼んでおきましたから、頑張ってください。

はあ……………

神様マジで可愛い過ぎかよ。

神様立場的に旅行行っても問題ないはずなのにね。だって、頼まれてる側だもの。

普段の業務はぶっちゃけ時間なんてどうとでもなる系の神様ならばいつでもできるし。真面目だからいつもやってるけど。

だから、今回も何気に俺に付き合ってくれたらしい。お土産まで頼んでくれたし。

俺の妄想による好意的解釈じゃないよね……これは。

和服幼女ちゃんがマスコットとして、爺い神とかでモニターしながら行ってんのかな？

なんか、社員旅行みたいだ……

はあ。

ほんと今度また旅行に誘おう。

どこかに遊びに行くのも良いなあ…。

ああくくくく…

マジであの少女に惚れて良かったわ。

その後めちやくちやお仕事した。

凄く…痛かったです（心が